

明治学院大学キリスト教研究所
オケイジヨナルペーパー18所

井深樞之助訳 新約聖書馬可傳俗話

鈴木進 解説・編

井深樞之助訳

新約聖書馬可傳俗話

日本聖書協会 所蔵

Meiji Gakuin University
Institute for Christian Studies
明治学院大学キリスト教研究所

鈴木進 解説・編

まえがき

初めは口語訳聖書であった。日本語聖書翻訳の歴史（プロテスタント）は口語訳に始まり、文語訳時代が長く続いた後再び口語訳になったといわれる。その初めは「ハジマリニ カシコイモノゴザル」で知られるギユツラフ訳『約翰福音之傳』（一八三七年、シンガポール堅夏書院）である。ギユツラフは日本人難船漂流漁民たちの世話をする傍ら、彼らの話す日本語を基にして聖書の日本語訳をしたのだ。ギユツラフ訳の後、S・W・ウイリアムズ、ベッテルハイム、明治に入ってからゴープル『摩太福音書』も、一部文語も混じるが、文体は話しことばの口語訳であった。

ところが本格的な日本語聖書翻訳である新約聖書翻訳委員社中訳『新約全書』（一八八〇年）、および常置委員会による『舊約全書』（一八八八年）は漢訳聖書の影響を強く受けた漢文訓読調文語訳になった。大正改訳に際しては、委員の一人、松山高吉が「文体は平易通俗ニシテ口語ニ近カラシムル事」と提案した¹ものの、やはり文語訳聖書となった。改訳は新約のみであって、旧約の方は明治元訳が引き続き用いられ、一九五五年、日本聖書協会口語訳『旧新約聖書』が出版されるまで、日本人は文語訳を読んできたのである。昭和になって、永井直治訳『新契約聖書』（一九二八年）もまた、原典直訳の文語訳であった。

聖書協会口語訳聖書出現以前にも口語訳がなかった訳ではなく、個人

訳ではあるが口語による部分訳がなされている。それが第二次大戦終了後は、日本社会と日本語そのものが大きく変化したことにより、日本語聖書は「口語」と断わることなくすべてが口語訳となった。このように聖書と訳の歴史は、文体において口語から文語へ、そして口語体という歩みをたどったのである。

先に述べた『新約全書』と『舊約全書』が出版された明治時代中期、福沢諭吉の談話体、俗文の文章もすでに現われていたが、一般に出版物は文語で書かれるのが普通であった。

そのような時代に、次の文体の画期的訳文の聖書が現われたのである。「おれハ神かみ孔子こイエスキリストきりすとハ福音えういんヲ始はじめトござりませ」。井深樞之助訳『新約聖書馬可傳』第一章一節である。当時未だ「言文一致」や「口語」という言葉が存在しなかった時代に、井深はこの訳を「俗話」と称し、一八八一（明治十四）年に上梓している。言文一致小説、二葉亭四迷の『浮雲』第一編が出る六年も前のことであった。井深の訳文は聖書翻訳という限られた分野のものではあるが、近代日本語が確立されていく途上において、国語史上も注目すべき文体といえるのではなからうか。

明治元訳として知られる『舊新約全書』、そして大正改訳『新約聖書』とはどのような聖書であったのか。その両者とも最近岩波文庫から復刻

刊行され、容易に手にすることが出来る（但し明治訳は旧約聖書のみ）。

しかし井深樞之助訳『新約聖書馬可傳俗話』は現在その存在がごく数点しか確認できてない。編者は日本聖書協会図書館で同書を目にした時、

これは邦訳聖書翻訳史研究上不可欠の資料ではないか、これを残して関心を持たれる方々の研究に供したいと思ったのである。その願いは、今回『オケイジヨナルペーパー』として復刻することにより実現した。この刊行の機会を与えて下さったキリスト教研究所、特に原稿を読み、出版にお力添え下さった渡辺祐子先生に、またコロナウイルスで儘ならぬ状況の中、事務的連絡を密にして下さった高橋英里さんに厚く御礼申し上げます。日本聖書協会の高橋祐子氏及び飯島克彦氏は貴重な資料の複写を快くして下さい。親切を忘れることが出来ない。

木村一先生からは、国語学上の助言、また文章表現に関する教えを受

けました。厚く御礼申し上げます。

今より八十年前のこの日、「戦いをりつぱに戦い、走るべき行程を走りつくし」天に凱旋した井深樞之助先生を思いつつ。

二〇二〇年六月二十四日 編者

註

(1) 『日本聖書協会一〇〇年史』八三ページ。「聖書改訳につき卑見」松山高吉の覚え書。

(2) 山本正秀「言文一致体」(岩波講座『日本語』10)で、「口語体」の初見は『言語学雑誌』第一卷第二号(一九〇〇年三月)と述べている。

目次

まえがき	1
新約聖書	5
馬可傳	5
俗話	5
マルコ傳	5
解 説	127
ま と め	153

新約
聖書

馬可傳

俗話
全

87

俗話
マルコ傳

耶穌降生一千八百八十年 米國聖書會社

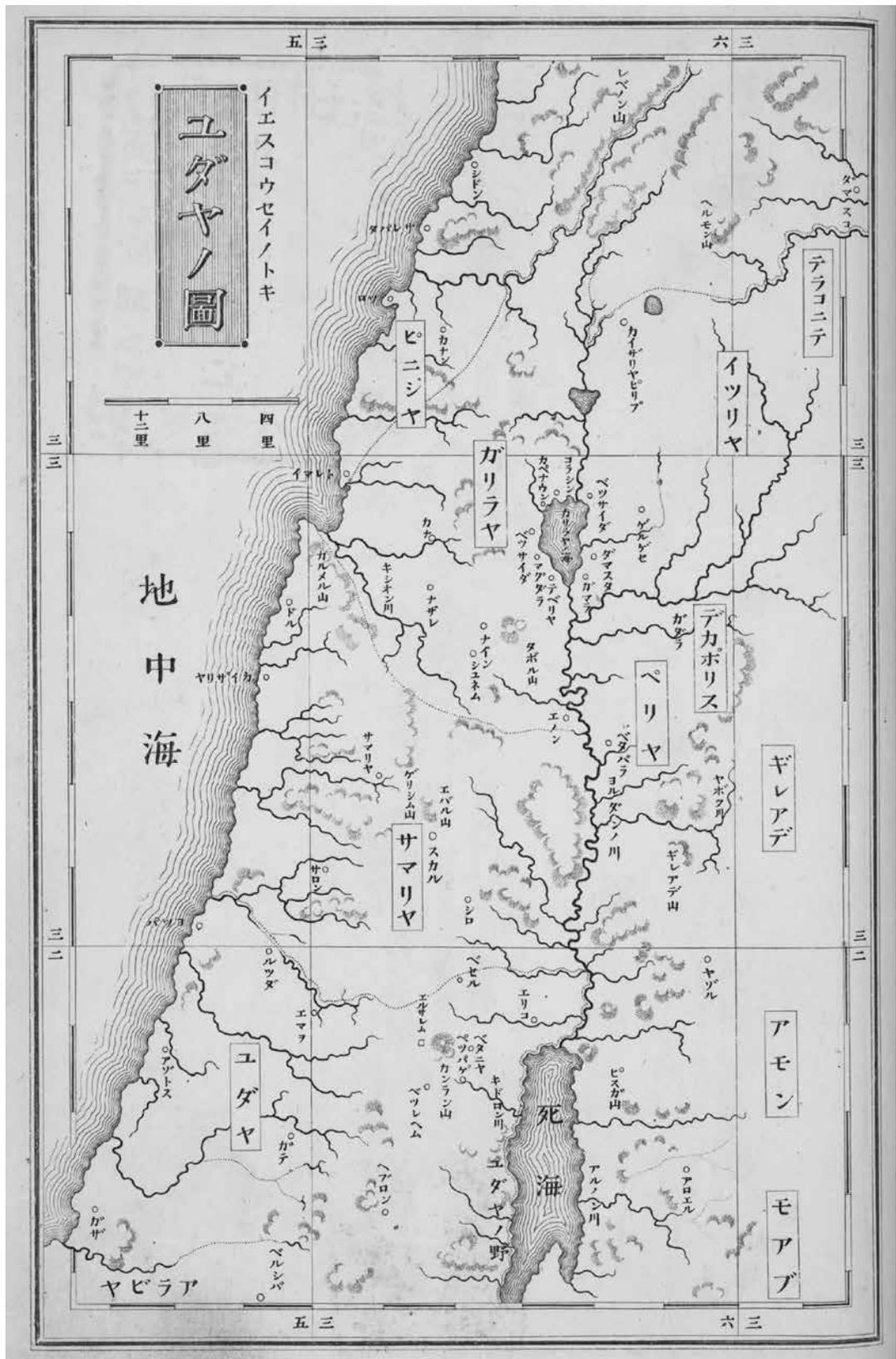
BIBL
聖書會社
藏板
番二十四

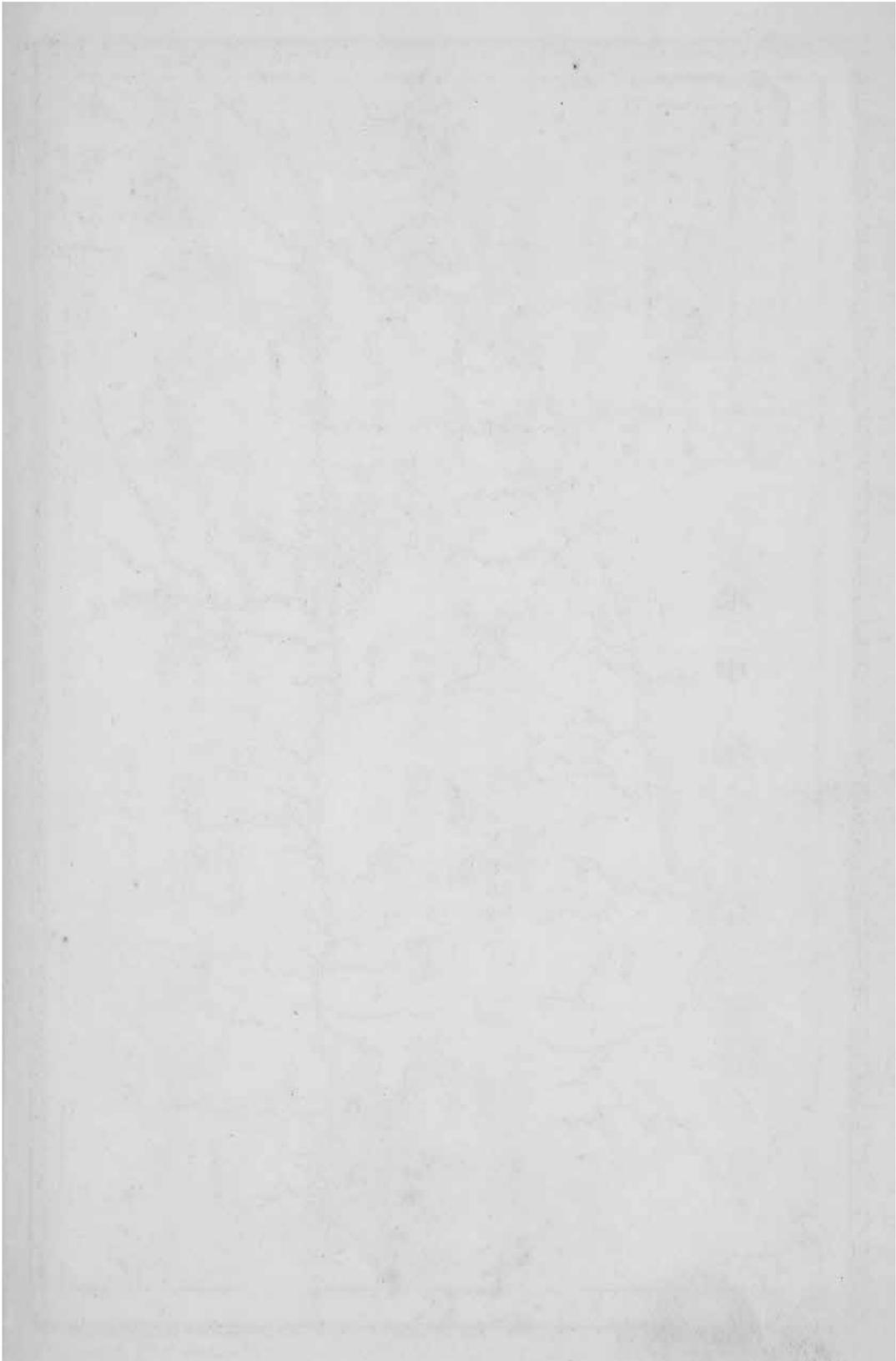
新約聖書馬可傳

日本聖書會藏書

明治十四年

日本東京印行





新約聖書馬可傳福音書

第一章

第一 章 出れハ神の子イエスキリストハ福音ヲ始はじめてござり
 ませ 二 預言者に見みよわれかんぢハ顔うほの前まへにわが使つかひをつり
 をさんられ汝あんぢのまへにその道みちを設まうくべし 三 野のに呼よべふ人の聲こゑ
 ありいはく主あゆの道みちを備そとへその道筋みちもちを直おほくせよとあるやう
 四 によハネハ野のでバプテスマをほどこし罪つみの赦ゆるを得えさせ
 ふためふ悔改くわいあらためのバプテスマを宣のべ傳つたへまゝした 五 ユダヤの
 國中くにぢゆうとエルサレムのひとくが來きておのく罪つみを白狀さくまやう志
 てヨルダシといふ河かでバプテスマをうけまゝした 六 によハネ
 ハ駱駝らくだのけぢろもをき腰こしにハ皮帶かわおびを志め蝗蟲いんごと野蜜のみつをた
 べて居をりまゝした 七 そう志めて宣のべつたへませるにハ私わたくしよりも

まさつたお方があとあらおいでにおゐるが私ハうゝんてそ
の履^{くつ}はしもをとくにも足^{たら}ぬるのでござりませ
もつてあふゝがゝにバプテスマをほどこまゝゝがその
お方^{くわ}ハ聖^{せい}靈^{りやう}をもつてあふゝがゝにバプテスマをおおどこ
ま^九あさみでござりませう そのころイエスハガリラヤは
ナザレ^十あらおいであされヨルダンでヨハネあらバプテス
マをお受^{うけ}あされ やがて水^{みづ}あらあがまさとて天^{てん}が
ひらけ聖^{せい}靈^{りやう}が鴿^{とび}のやうにそ^{十一}れ上に降^{くだ}るのを御^ご覽^{らん}あされま
した また天^{てん}あら汝^{なんぢ}ハわが愛^{あい}子^こわが喜^{よろこ}ぶところの色のあ
りといふ聲^{こゑ}がありませまた〇^{十二} それあらまぐに聖^{せい}靈^{りやう}がイエ
スを野^のにゆゑせました^{十三} イエスハ四十日^{にち}のあいだ野^のにお

いであされてサタンに試まはられ獸けものどもにおいであされま
 したそこへ天てんの使つかひたちがきて事ことました○ヨハネが囚めら
 れてうらいエスハガリラヤへおこしあされ神かみの國くにの福音ふくいん
 をのべ仰おほせられまをにハ十五 毛けをか期きハ十六 満みちた神かみの國くにハ十七 近ちかくあつ
 た汝なんぢ曹そう悔かい改かめて福音ふくいんを信まぜよ○イエスがガリラヤカブラカ湖うみ
 の邊あたをお行あつあされるときシモンとその兄弟きやうだい比ひアンデレレが
 湖うみに網あみを投うつてゐる魚いさなのををご覽らんあれまいたこの二人ふたりハ漁れうし者しやで
 ありまを十七 イエスが二人ふたりにむあつて我われに從またへわれハ汝なんぢ
 曹そうを人ひとを漁まるを乃なとして遣つさうと仰おほせられると十八 二人ふたりはを
 ぐにそ乃な網あみをすて、イエスに去いたがひました十九 うとあら
 少せう先せんへお進まあされセペダイ乃な子こヤコブコどろの兄弟きやうだい比ひヨハ

ネガ舟ふね比よなあで網あみをつくろふて居まのをで覽らんなされて二十 是
 ぐにお呼よびふさると二人ふたりの父ちちのゼベタイを傭人やとひにんといつ志よ
 に舟ふねにのこまておいて志よたがひました二十 ○ それあらカベ
 ナウムへまゐりましたガイエスハをぐに安あん息うく日にちに會くわい堂だうに
 ばいつてお教せうふさると三三 人ひと々びの教せうにおどろたました何
 といふに學がく者しやのやうでハかく權けん威ゐあるをの、やうにお教せう
 させられたあらでござりませ三三 其その會くわい堂だうに穢けつれた鬼おまにつあ
 れたをのがあつて二四 あ、ナザレハイエスよ私わたくし共どもハああた
 と何なんはく係へいがあるままにああたハ私わたくし共どもを滅ほろぶにおいであ
 されましたああたハ誰だれであるあ知しつて居ままにああせ
 ちちろみの聖せい者しやでござりませと呼よんでいひました二五 イエスハ

六れをせめて黙だまれそこを出いでよと仰おほせらるゝと二六汚けがれた鬼おにが
 そのひとを拘ひき縛つさせ大おほ聲こゑにさけんでその人ひとを出で行いきまゝ
 た二七人ひと々々ハみお驚おどろて六れハ何なにごとであらう六れハ如い何うか
 新あらゝい教きであらう汚けがれた鬼おにでさへも權けん威ゐをもつて命いのち令つ
 れば従したががつたと互たのひにたづねまゝた二八そこでイエスの名な聲こゑ
 があまねくガリラヤの四よ方ほうへ廣ひろまりまゝた二九それあら
 會堂くわいどうを出でヤコブとヨハネとゝもにシモンアンデレいへは家いへに
 行いと三十シモンは岳たうとめ母ははが熱ねつ病びやうでぬてをるゝら或ある人ひとがまぐに
 それことをイエスにまをゝあげると三一イエスハ行いつてその
 手てをとつておゝこゝあさるとまぐに熱ねつがえおれて皆みなは給たま
 事ことをいたゝまゝた三二夕ゆふがた日ひのいるとき人ひと々々をべては病びやう

人にんと鬼おににつおられたをイエスとところへつれてきまました
三三 邑まち中のぢゆうののが門もん前ぜんにあつまりまたた
三四 イエスハ様さま々のくの病やまひを患わづらつてを多おほくの人ひと々くを愈いやくまたおおなくの鬼おにを逐おひ出だした
鬼おにののいふふとを許ゆるさりませんでござり
まましたそれハ鬼おにがイエスを去をつて居をるうらでござりませ
三五 味あじ爽あけまへにイエスハそやくおきて人ひとの居をらぬとこへ行いつて
そこでお祈いのりさされまました三六 シモンとまたいつまたよに居まつた
そののどもがその後あとを尋たづねて三七 イエスにお逢あひまを申ました
皆みなあかたを尋たづねてをりませと申まをあげると三八 イエスハいざ
みれより附近もよりの村むら々くへ教きをのべつたへに行いかう我われハ三九 ちみれがために來きたのであると答こたへあされつひに

ガリラヤの國中くにをおあるきあされてその會堂くわいだうで教をのべ
 また鬼おにをおひだされまゝた○ 癩病らいびやう患者ものが一人ひとりイエスと
 ところへ來きて跪ひざまづいて願ねがつてまをしませにも御意ごいにかあ
 へばあまたハ私わたくしを潔きよくして下くださるゑとが出来でませといひ
 まゝた四一 イエスのみれを不便ふびんに思召おもひめて手てを比ひべてそれに
 接つてわが意こころにうあつた潔きよかれと仰おほせられまゝた四二 そうせむ
 どせむに癩病らいびやうハそかれてその人ひとハ潔きよかまゝた四三 イエス
 ハきびしくみれを禁いめてきつと人ひとに何なにもそあゝてハあら
 ぬぞたゞ行いつておのが身みを祭司さいいにみせその潔きよられた證據えようこに
 モーセがいつけたものを獻ささるといひつけておやりあさ
 れまゝた四五 けれどもそはまのハそこを出で、方ほう々くいひふら

いてかたに播ひろめたをのゆゑ此この後のちイエスの明ありに邑まちへ入いり
 訪あはさるゝことがむづろくあつてたゞ人の居をぬところへ
 おいであされまゝいたが人々ひと四方いたううらそこへまゐりまゝいた
第一 章 數ま日ど比ち後のちイエスハまたカペナウムへおいであされ
 たどあろが二その家いへに居をれるといふあどが聞きへるとはぐ
 におやくは人ひとが集あつてきて門口かどぐちに立たつべき場所しよもあいやう
 にかまゝいたそこでイエスハその人々ひとに教をお宣のべあさ
 りまゝいた三さてこゝに癱ち瘋うをやんで居をるをのを四人よにんに昇あ
 せてイエス比ちおん許もとへつれてきたをのがありまゝいたが四
 込こ合あつて側そばへ寄よ附つれぬをのゆゑそのおいであさるところの
 屋や蓋ねをばいで癱ち瘋うのひとを床とこ比ちまゝ五繩つおろしりまゝいた
 五
イ

エスハその信仰まんううを御覽ひらんあされてちゆうぶ此こひとに子こよ汝かんぢら
 の罪つみハゆるされたぞとおふせられまいた六 六、に數人むにんは
 學者がくしやたちが坐まへつて居をりまゝして心こころはうち七に 七、こは人ひとハあぜこ
 此こやうあ悪口あくこうをいふであらう神うみの外ほかに誰だれが罪つみをゆるせよ
 とが出來でるをのりどまをくまいた八 八、イエスハまぐにそは
 人々ひとびとハ心こころはうちこころにこはやうあふとを論ろんずるのを御自分ごぶんの
 心こころにお知しあされておふせらるゝにハ汝曹かんぢらハあぜそのやう
 あふとを心こころのうちこころに論ろんずるゝ九 九、癡瘋ちゆうぶのひとに汝かんぢらの罪つみハ赦あむ
 されたぞと言いふのと起おこて汝かんぢらの床とこを取とつて行ゆといふのとどち
 らが易やすいゝ十 十、今汝曹いまかんぢらに人ひとの子こハ地ちにあつて罪つみを赦あむむ權威けんい
 あることを知しらせんとおふせられてつひにちゆうぶの人ひと

にむらつて十一 われ汝かんぢろにいふ起おこて床どこをどつて汝かんぢろの家いへに歸かへれ
とおふせられまむと十二 その人ひとハむぐに床どこをどつて人々ひとぐの
前まへに出でまゝれば皆驚おどろいて未まだこんあふを見みよことハ
あいといつて神かみをあがめまゝ十三 ○ イエスハまゝ海邊うみべへ
お行いかされよとあるがみんあ参まゐりまゝあらその人々ひとぐに
おをへあされ十四 それうら先さきへおいであされてアルパヨ
の子レビといふ名なのが税吏みつきざりの役所やくしょに坐まつて居をるのを御覽ごらんあ
されて我われに從したがへとおふせられまむとその者ものは立たつて去いつが
ひまゝ十五 ○ それうらイエスがその家いへで食たべ事をあさると
き多おほくの税吏みつきざりと罪つみある名なのがイエスとお弟子でしとちといつ
志こころよにその坐ざに就つまゝ十六 此等これらの名なのが多おほくあつてイエスに

從よひまいくと 十六 學者がくしやとバリサイの人ひとハイエスがみつぎとり罪つみあ
 るをのといつくよにを食を事ををあされるを見みてそのお弟で子し
 にむらつつて税みつぎとり罪つみあるをのといつくよにを食く飲のみあされる
 此こハいうか何なんかあるを譯わけであるをといひまいくた 十七 イエスハそれを
 おき聞きあされて康すこ強やかあ者のいやや者は助たすけハいらぬがやまひ病はあるをの
 がいらぬ需いらぬ此こであるを我わが來きた此ハたらし義ぎ人ひとをまねくためでハあく罪つみある
 人ひとをまねいていちぢ悔く改あらためをさせるためであるをとおふせられまいくた ○
 十八 ヨハネは弟で子しとバリサイはひとハ断食だんじきををるをとがあ
 つたをのゆゑにイエスはところへ來きていひまをにハヨハネ
 此こ弟で子しとバリサイは弟で子しハ断食だんじきををるをとがあなたは弟で子し
 ハあぜ断食だんじきををいたくませんらイエスハその人々ひと々びにおふ

せられまてにハ新郎はなむこ比朋友ともだちハその新郎はなむこといつまよに居をる
 うちに斷食だんじきをることガ出來でるう新郎はなむこといつまよにをるう
 ちハだんじきをすることハ出來でぬ二十將來はちに新郎はなむこをとられる
 日ひが來くるであらうその日ひにハ斷食だんじきもをるであらう二二誰だれも
 新あた志ちい布ふを舊ふるい衣きものに縫ぬいつける者ものハ無ないえし然さうをるあらハ新あらた
 に補おぎなつたところガ舊ふるいところを綻ほころぼしてその破やぶれがうへつて
 惡わるくあるであらう二三又また誰だれも新あた志ちい酒さけを舊ふるい革囊くわふくろに入いれ
 のハかい若もそうをるあら新あた志ちい酒さけハそのふくろを破やぶりさ
 いて酒さけハもれいであはぶくろハ破やぶれるであらう新あた志ちいさ
 けハあさらしいうはぶくろに入いるべきものである○二三さ
 てイエスが安息日あんきふにちに麥むぎ島むらをおとほりかされるところガお

弟子^{でし}たちが行き^{ある}かからむぎの穂^ほを摘^{つみ}はじめたれば^{二四} パリ
 サイ^{サイ}は人^{ひと}がイエスにむらつてまの人^{ひと}々^々ハ安息日^{あんそくじち}にまじ
 きあどを毛^もるの^のほどういふ譯^{ワキ}でござりま毛^もりといひま
 た^{二五} イエスはあたへておふせられま毛^もにハかんぢらハマ
 だダビデおよび從^{とも}に毛^もつた^たものが乏^{なほ}くて飢^うたとさにか
 たあどをよまぬ^{二六} その祭司^{さいし}は長^{なが}アピアタルはとき^{とき}に神^{かみ}
 此^{いへ}家^{いへ}にはいつて祭司^{さいし}の外^{ほか}ハ食^{くら}ふまじき供物^{そかへもの}のパンをくひ
 りつどもにおつた毛^ものにも與^{あたへ}たあどをまだよまぬ^{二七} りま
 たおふせられま毛^もにハ安息日^{あんそくじち}ハ人^{ひと}のため^{ため}に設^{もうけ}られた毛^も
 で人^{ひと}ハ安息日^{あんそくじち}のため^{ため}に設^{もうけ}られた毛^ものでハあい^{二八} されば
 人^{ひと}の子^こハ安息日^{あんそくじち}にさへも主^{まゆ}たる毛^ものである

第三章 イエスがまた會堂にお入りあされたところが一手

拈た毛の二がありまゝた 人々ハイエスを訟へやうとおも

つて三あの人を安息日にお醫いあさるうどうかと窺つて居

まゝた イエスハ手の拈た毛の中に立とおふせられ

また人々にむあつて安息日にハ善いあどをあせのど悪い

あどをあせのど生た毛の救げると殺せのどどちらがあ

せべきあどであるあどおふせられたればひとくは黙て

をりまゝた イエスは怒をふくんでみまはしその毛のど

もの心の頑硬あるを憂ひあされて手の拈た人にかんぢ

の手を伸よとおふせられまをその毛のハ手を伸せとせ

ぐに他の手のやうに愈まゝ六 パリサイの人ハそこを出

、「どとうゝてイエスを殺ころそうとおもつてをぐにへロデは
 黨ともがらと相談そうだんいたしまゝした。○七 イエスがお弟子でしあちとゝもに
 海邊うみべへお退まひぞきあされあところがおおくのひとがガリラ
 ヤよりあまがひましあまあユダヤ八 エルサレムイドマヤ
 ヨルダンのむらふまあツロとシドンのをとりあら多おほくの
 人々ひとがイエスの爲かされあことを聞きてむらがり來きましあ九
 イエスはひとぐのおおぜいのあめに擁おさあやまされぬや
 うに小舟こぶねをわがあめにそあへおげとお弟子でしにおふせられ
 ましあ十 あれハイエスが數多あまのひとぐをお愈いやしあされ
 あによつてをべて病やまひあるえのが手てでイエスに捫さばふとて
 おしよせああらでござりまを十一 まあ汚けがあ鬼にがイエスを見み

てその前にまへ俯伏ひれふてさげんであるは神かみの子こでござりまを
とまをしぬのを十二イエスハ彼等かれらにわれを揚あちむとあられ
ときびくお禁いまめあされまいた十三○イエスハ山やまにおのほ
まあされてその心こころに適うかふふををよびあされまぬれば
そのえのどもがまゐりまぬ十四そこで十二人にんを立て御自ごじ
分ぶんと、もにおゝきあされまぬ教ていへを宣のべつぬへるぬめにつ
うば十五うつ病やまひを愈いやし鬼おにをおひだすの權ちからをお授さづけあされま
しぬ十六そう志こころてシモンをペテロと名なづけ十七ゼベダイの子こヤ
コブとその兄弟まじやうだいヨハネとこの二人ふたりをポアテルゲとお名なづけ
あされましぬこれを譯とびば雷鳴うみの子こといふこととでござりま
ぬ十八まぬアンデレピリバルトマイマタイトマスアルバ

ヨの子ヤコブタツダイカナン十九のシモン十九まゝイスカリオ
テのユダこれハイエスを賣わたしゝるのでござりませ二十これ
らの色の家がいに入りませいしゝ多おほくの人ひと々がまあつまり集あつまりきて食たよくじ事
をせる暇ひまもござりませんでありま二二しゝその親おん屬ぞくが聞きて
彼あれハ氣きが狂ちがつゝ多おほくといつて捕とらへに三三まあつまりまあつまりエルサレ
ム二四あら下くだつ多おほく學者がくしやもあ二四ればベルゼブル二四につおにゝれて鬼おに
の王おうによつて鬼おにをおおにひおにいだおにせおにるのであるとま二五をおにまおにしおにゝ
そこでイエスがそのひと二五を呼よんで譬たとへをひおにいておおにふおにせおにら
れおにますおににどおにうおに志おにてサおにタンおにがサおにタンおにを逐おひ出おひだおひせおひことおひがおひでき
るおひうおひもおひ一おひ國くにが内うち分われを志あらうて争あらううあらうあらあらうばその國くにハ立たつことあらうが
出で來きぬ二五色いへ一いへまいへゝ家いへが内うち分われを志あらうて争あらううあらうあらあらうばその家いへハ立たつ

ことが出来ぬ二六 色しサタンがおのれに悖立もどりたつてわれあら
そうならばサタンハ立たつことが出来ずをばに終はるであらう二七 誰
でも勇士つよいものの家いへにゐつてその道具どうぐをうばひとらふとおも
はゞまづその勇士つよいものを縛たむらねばうばひとることハ出来ぬそ
れを縛たむつてあらその家いへをうばひとるであらう二八 われまこ
とに汝曹あんぢらにいふ人ひとのをべての罪つみと瀆けがせとこそのげがれハ
赦ゆるされるが二九 聖靈せいりやうをけがせのハ決けつしてゆるされぬ屹きつ度ど
限うかりあき刑罰けいさつに于あづるであらう三十 ろく仰おほせられよのハひとび
とがイエスハ惡鬼あくまふつられよと申まをせよあらでござります
三一 その兄弟さやうだいと母ははが來きて外うとによつて人ひとをつらばしてイエス
をよばせましよ三二 お不ひくの人ひと々々がイエスのまばりにすは

つて居をつて御覽をあさいお母をさんと御兄弟をたちがそとにた
 つてあかたをたづねておるであさりまをたまを去たれば
 三三 イエスハまたへてわが母をわが兄弟をどハ誰をのことである
 とおふせられて 三四 まはりに坐をつて居るひとぐをみまは
 しておふせられまをにわが母ををみよわが兄弟ををみよ 三五
 すべて神の旨をに志たがふをのハすあそわが兄弟をわが姉を
 妹をわが母であるぞとおふせられました
第四章 イエスがまた海濱をで教ををおはじめあされたところ
 がたほくの人々が集をまつてまゐりましたらイエスハ舟
 に乗をつて坐をりあされおなくの人々ハみあ海をにそふて岸をに
 立をました 二 イエスハ譬ををもつてその人々をにおなくのこと

をお教へふとまその教のうちに三おふせられますにハ聽
 け種播ものが播に出て播四あるときみある種ハ路傍みおち
 たが空の鳥がきてこまを食五ある種ハ土のうすい磽地
 みおちたが土がふりくふいりらすぐみ萌出六日が出
 ぬまば曝りま根がふいりら枯ぬある種ハ棘七のありみお
 ちぬが棘がそだつてこまを蔽八いだりら實をむすばあんだ
 まぬある種ハ沃壤みちぬがその苗がはえ出、蕃りあ
 るひハ三十倍あるひハ六十倍あるひハ百倍乃實をむすん
 だ九まゝ耳あつて聽えるものハきげとおせらまました
 ○十人々此居ぬときイエス此十一側み居たもの十二弟子
 とがこの譬を尋ねましたまばそのものどもみ仰せらま

ますみハ汝曹かんぢうみハ神かみの國こく比奧義おくぎを知ることしを賜たまへつたが
 他ほかの色のいろにハせべて譬たとへを毛けつてせらるゝのである十二 それ
 ハうれらが視みるときみも視みてもみず聽きとききにきいても悟さとず心こころ
 をあらためて罪つみのゆるしをうけぬためである十三 まゝおふ
 せらるゝにハかんぢらみの譬たとへを知らぬのさらばどうして
 せべての譬たとへを去さるゝとができる十四 播者まきものとハ教きをまくと
 とである十五 みちばとに教きのまうまうとハ教きをきいととき
 にせぐにサタンがきてその心こころにまうれと教きをうばひとる
 といふとである十六 まゝ磔地いぢちにまうれと毛けのいろとハ教きをき
 くとききにせぐによるこんでみれをうける十七 けれどもれの
 れに根ねがかいゆゑとハ暫時ざんじのことであるそうして道みちのいろ

めに難儀かんぎり迫害くわいにあふときハ一ちまつまづち礙まじをの、ことであ
る十八 ま一と棘いばらの中なかにま一りれ一もの一とハ教をいへを聞きても十九 この世よ
のこ、ろづ一り一ひと貨財たつりの惑まどひとさま一づ一の情欲ぢやうよくがそいつて
きて教をいへをふさぐ一ゆゑにどう一く實みをむすばぬものといふ
ことである二十 沃壤よいちにま一りれたもの一とハ教をいへをさ一ひて一それを
う一げある一ひハ三十倍たいある一ひハ六十倍たいある一ひハ百倍たいの實みを
むすぶもの一といふことである三 ○ ま一とた一ふせ一ら一ま一す一に
ハ燈ともしびを持もつて來きて斗たまの下したや床とこの下したよ一なくもの一が一ある一ハ燭臺あぶくだい
の上うへよ一た一き一ハせぬ一り三 隠かくま一て顯あきらま一よ一あらぬもの一ハ一あく一藏つん
で露あられハ一まぬもの一ハ一あい二三 耳みみあ一つて聽きえるもの一ハ一き一げ二四 ま
と一その人ひと々々よ一た一せ一ら一ま一す一よ一ハ一あ一ん一ぢ一ら一聽きど一こ一ろ一を一慎つ

しめあんぢらが度るところの量をもつてあんぢらも度ら
 せるであらう聴くあんぢらよいな不加へらせるであらう
 二五 かぜあまは有るものよはあ不與へらま有ぬものハもつ
 てぬるものまでもどらせるであらう〇 二六 まよれふせらま
 ますよハ神の國ハ人が種を地まよくやうかものである 二七
 夜日おきふしするうちよ種ハはえてそだつがどういふ譯
 であるうしきぬ 二八 全体地ハおのづから實をむすぶもので
 初めよハ苗が出つぎよハ穂が出穂のあま熟した實が出
 来る 二九 もとや實がいまは穂ときが來たよよつてすぐよ鎌
 を入まさせるのである〇 三十 またおふせらまますよハ神の
 國ハ何にかぞらへ何比譬をもつてたとへやうの 三一 まづ一

粒つぶの芥種カイシュのやうなものであることを地ちまもなくときよハ萬よろづ
 のた糸いとよりもちひさいが三三播まてあら萌出はえまばよるづの野や
 菜さいよりハ大おほきくろつおなきい枝えだがで出でて空そら乃鳥とりがそ比ひ蔭かげま
 棲すむ不ふどよある○三三 | イエスハ人々ひとびとが聞きここののできるだけ
 おなく比ひこのやうな譬たとへをもつて教ををおのべおさま三四譬たとへで
 おげまば人々ひとびとよたうたりあさませんでありましたがた
 弟子でしたちばうり居ゐたときよをまべてのことことを解とけまきり
 務むあさりました○三五 | さてその日ひの夕くれがよイエスハ弟子でし
 たちよ向むかひ岸きへ渡わまをたふせらまはしたあら三六 | た弟子でした
 ちハひとくを歸かへらせてイエスが舟ふねよたゐであさましたの
 をそのは、た供ともをして渡わりはしたはたなり比こ小舟ぶねもいつ

しよに参りほした三七 時ときは大風おほいぜがたこつとまきて浪なみがうちこ
 みやがて舟ふねは満みるばかりなりました三八 イエスハ船ぶねは方ほう
 枕まくらをして寝ねつてたゑでかましましたがた弟子でしたちが起おこ
 してまをします三九 先生せんせいハ私共わたくしどもが溺おぼれてもたうまひあさり
 ません三九 イエスハたきて風うぜを戒いましめまゝ海うみは静しづまりてた
 だやうよあまをたふせらまますと風かせハやんでたいそう穩たかか
 よかりました四十 そうしてりまらよたふせらまます四一 ハ何なに
 それやうよ恐おそるゐあんならハかせ信あん仰うやうがあいら四一 た弟で子し
 たちハたいさうたそまてたがひよこまハどういふ人ひとであ
 らう風うぜと海うみでさへも従したがふとまをしました
 第五章 海うみを渡わたつてつひよガダラ人びとの地ちよつき二 舟ふねあらイ

エスガ靴上りあさきたとき一人は惡鬼よりきたものが
 すぐ墓場へら出てあひました。このひとへはうばを居
 處よいたして居ましてたびく。桎梏と鏈で繫でも鏈をき
 り桎梏をこはすものゆゑだまこををつかぎえるものも
 なく制しえるものもなく。夜も晝も始終山と墓場を居て
 叫んだり石をもつてたのまは身も焼をつげたりして居ま
 した。このものがはるうよイエスをみて馳つて來て拜み
 七 大聲をだしてまをしますよ。至上神は子イエスよ私ハ
 あなたとなんか關はりがあるます。神よよつて願ひます
 どうぞわたくしをくるしめてくださるな。イエスが惡鬼
 よむらつて人より出るとたふせらましました。うらうく申し

たのでござります九 イエスハウレモのよなんぢ名ハあ
 よといふらとおたづねあされましたればこたへてわたく
 しどもハおなせいだあらわしくし名をレギヨシとまを
 しますといつて十 頻まきりにこの土地あらわしくしどもを逐出おひいた
 してくださいさるかとイエス十一願ねがひました さてこゝよな
 くは豕ぶた群むれが山やま草くさを食くらふて居ゐりましたが十二 惡鬼あくまがみな願ねが
 つてわしくしどもを遣やつて豕ぶたよはいらせてくださいといひ
 ます十三 伊いエスハすぐよな許ゆるしなされましたそこで汚けが
 ました鬼おにがその人ひとあら出でて豕ぶたよ入はいりましたまばなよそ二
 千匹せんびきほどの群むれがえげしくうけくだつて山う坡げあら海うみよなち
 て海うみよなほきてま十四まいました 豕ぶたを牧うふ者ものが遁行にけていつてこの

ことを邑まちや村々むらで話かたしましたまはひと、そのあつたこ
とを見みて出でて十五 イエス此こゝところへきて惡鬼あくまよつりきてレ
ギギオンオンをもつて居おた人ひとが衣服きものをきて正氣まをうきで坐まはつて居をるの
をみてたそまあひました十六 このことを見たみたものどもが惡あく
鬼まよつりきたものゝことゝ豕ぶた此こゝことをををかしましたまは
十七 イエスよそ此こゝどゝあるをた去ざりなざるまを願ねがひを止めま
した十八 イエスが舟ふねよりのりなまゐるとき惡鬼あくまよつりきた
ものガイエスとゝもふ居ざりたいとねがひました十九 したが
はたゆるしなまゐらずに汝あんぢ此こゝ家いへに歸かへり親屬あんどく此こゝものよ行いつて主ま
のあんぢよなまゐた大おほいなるまとゝなんぢを憐あはれみたまはふ
たまををなせとねがふせらまはした二十 う此こゝものハ行いつて

エス此れの色よなしくださまた大なることをデカポリス
 よいひふらししましたまきば人々みかねどるまました○
 エスが舟に乗てまた海に向岸へ渡りかきたるところが
 大勢のひとがあつまつてまゐりましたイエスの海ば
 たよれるでかきまました
 いふものがきてイエスをみてそれ足下よふく
 ますどうぞ救はれたいでかきて手を按くたさりました
 そうすまば女ハ生ませうとまをしました
 ものとよもたいでかきるとき大勢比ひとが去たがつま
 擁あひました
 二五
 二二
 二四
 二三
 二二
 二一

ものハ誰だれであるとおふせられます三三 イエスハ其の
 ことを爲なした婦をんかをみやうとおぼしめして側あたりを御覽ごらんなさると
 その婦をんかハたそき戦慄をのゝいておはまの身みよなさらまことをしつ
 三その前まへへ來きて俯伏ひれふてことごとく白狀そくじやういし三四まゝ
 エスハそのものよ女むすめよなんぢ信仰しんかうがなんぢをま三三くつ
 安然やすらひに行ゆけふんぢはたまひハ愈かほるとおふせられます三五 ○
 イエスが其のとおをおふせられます三六 會堂くわいだうは宰つうさは家うち
 くら來きてまをいすにハお娘むすめごハもうお死おにあされま三六した
 のに何な先生せんせいに御苦勞ごくろうをおかけあさります三六 イエスハ
 ぐにその話わがをこととを聞きて會堂くわいだうはつかさにおふせられます
 三にハ恐おそれるあたゝ信しんぜよ三七 イエスハペテロとヤコブとそ

の兄弟きやうだいヨハネは、なりハだれもともに行いかどをおゆるしお
 さらりませんでありました。三八會堂くわいどうは、つうさ宰さは家いへにおいておさる
 とひとひとがさへぎたて騒さわ立ておきさげんで居ゐるを御ご覽らんおされ三九
 内うちに入いつてその人ひと々々におふせられまををにかぜそのやうに騒さわ
 ぎたて、むそめあくら女むそめハ死しんだのでハかいた、ね寢ねたのである
四十そのひとひとがはいイエスを晒あざわらひ笑わらましたがイエスハひとを
 みお外うちへ出だして女むそめは父ちち母ははとお従つぎまをしたものどもを引ひつ
 れて女むそめは臥ふいてゐるところへおはいりおされ四一女むそめの手てをと
 つて「タリタクミ」とおふせられました四二おれを譯わけば女むそめよわれ
 汝なんぢに命いのちず起おきよといふおとでござりませそこで女むそめハ直ただに
 おきて行あるきまゝと九年とハ十二才さいでござりませひと人ひと々々ハひとく

おどろきました四三 イエスのことを人に知らせるあと
きびくお戒いまめおされまた女むまめに食物たべものをやれとお命めいじお
されまゝした

第六章

さてイエスのあゝを去さつて故郷ふるさとへおいでなされまゝ

たがお弟子でしたちも従したがひまゝした 二 安息日あんそくにちにかまゝしたあら

會堂くわいどうで教ををお始はじめめおされふと人々ひとがそれを聽きて奇あやんでま

をゝますにほどうゝてお人ひとにみんな事ことがあるであらう

誰だれの智慧ちゑをうけてみんな不思議ふしぎな事わざもあはれ手てです

るであらう 三 全体ぜんたい彼あれハ木匠だいくでなはいりマリヤマリヤ女子こヤコブ

ヨセフヨセフダビシモンシモンの兄弟きやうだいでその姊妹あひまいもうともあゝに我わ々くといつ

まよに居ゐでははいあといつてイエスに礙つまづきまゝした 四 そは

でイエスが人々におふせられますにハ預言者ハその故郷
とその親類あんなるいその家いへにハ尊たふとまれぬとハい
スハ此ととみるでハ病人びやうにんに手てをつけてたゞ數人たんにんをお愈いや
あされたばありでそれなりにハ不思議ふしぎな事をあさるゝと
が出来で来きませんでありまゝ六またその信しんぜぬのを不思議ふしぎ
におほしめしました七そうして村々むらを經巡へめぐつて教ををあされ
ました七○イエスハ十二で弟子しをおよびあされ二人ふたりづゝ
遣つうははしめ惡鬼あくまを逐出おひだまちあらをさづけ八またいひつけて
おふせられませにハ一ひと杖つゑ此こなりハ旅たび用よう意いに何なにももつ
て行ゆくふ旅袋たびぶくろも食物くひものも金かねも持もつ九たゞ履くつをいて衣服きものも
ふたつ着まて行ゆくふ十またおふせられますにハ何處どこでもひと

の家いへに入はいらばそととみろを去さるまでハそとに居をれ十二 せべ
 て汝曹あんぢらをうげずあんぢらに聽きぬものハそとをさふとき
 證據えようこのため足あは下したは塵ちりを拂そらへわれまことにかんぢら
 につぐ審判さばは日ひにハソドムとゴモラハあまの邑まちよりもあへ
 つて心易こころやすいであらう十二 お弟子でしたちハ出でゝひとぐに悔く改あらた
 むべきまを教をへ十三 またおなくは惡鬼あくまをおひだゝまたおな
 くびやうにんの病人あぶらに膏をつけておなゝまゝ十四 イエスハ名ながひる
 まりましたればヘロデ王おうハあれを聞きてバプテスマのヨハ
 ネよみのへが甦よつたりら不思議ふしぎあわざをさすのであるとまをまま
 した十五 或ある人ひとハエリアであるといひあるひとハ昔むかしの預言者よげんしゃ
 此こやうよげんしゃの預言者よげんしゃであるといふものもありまゝ十六 へロデ

ハ聞てきこみれハわがその首くびを斬きつたところ此ヨハネである彼あれ
 が魅よみがへつたのであるとまぢしました十七 あせといふにさきに
 ヘロデハその兄弟きやうだいピリポつま妻ヘロデヤつま此つまみとによつて人ひと
 をつらばしてヨハネを召捕めいとつて獄ろうやに入いれましたそれハヘロ
 デがをんか此婦をめとつたのを十八 ヨハネが戒いましめて兄弟きやうだい此妻つまを入いれ
 るハよろしくあいどまをしたあらでござります十九 ヘロデ
 ヤハヨハネを怨うらんで殺ころそうとおもひました二十 がそふいふわ
 げにハ行ゆらずに居まりましたヘロデハヨハネをうやまひまた
 保護まもりそ此いふみとを聞きておかく此つまみとおおとあひりつ喜よろこ
 んでそ此いふみとをきま二した二 志こころするにヘロデハそ此
 誕生たんじやうび日にもろく位くらいたうき人ひとと千人せん此長ちやうどガリガリラヤ此貴たふ

てひとくくハおなくイエスを志つて村々あら徒では志つ
 てその行うとを互どころへ先に由いてイエス此どころへ
 あつまりました。○ 三四 イエスハ出、おせいな人をと覽あ
 されまに牧者のあい羊此やうか有様あるによつて不憫
 におほくめ志て様々此處をを教へてじめあさりました
三五 その日もそや暮あ、しましたときお弟子たちが来てま
 をしまにハこ、は寂莫どころでハある、時刻も、う晩
 ござりまにが 三六 人々のたべ互をのがござりませんから自
 分であたり此村里へいつてパンを買ためにおつかハ、あ
 さりませ 三七 イエスハ汝ら此れに食させよとおふせられま
 したお弟子たちがまをしまにハ私どもハ銀二百不ども

新約聖書 馬可傳第六章 自卅四至卅七節 三十九

パンをあつてきてやつて食たべさせませうか 三八 イエスがおふ
 せられまをにハパンハ幾個いくばあるかいつて見みろお弟子でしたち
 ハみてそ此この數かずを知して五いほつ此このパンと二ふたつ此この魚うをがありまをと
 ぬへまゝした 三九 イエスハ人ひとをみんお組ぐみ々に去さて青あを草くさ此この上うへ
 にをハらせよとおふせられまゝしたから 四十 あるひは百ひやふ人にんあ
 るひハ五ご十じゆ人にんづ、並ならんで坐まはりまゝした 四一 イエスハそ此この五いほ
 つ此このパンと二ふたつ此この魚うをを取とつて天てんを仰あふぎ謝しゃ志してパンをわりお
 弟子でしたちにあたへてひとづ此この前まへにおかせまた二ふたつ此この魚うを
 を人ひとごとくにわけておあたへおされまゝした 四二 ひとづハみ
 あたべて飽あき 四三 そ此このパンと魚うを此この屑くづをひろつたところガ十二
 此この筐くわにいっぱいにありまゝした 四四 そのパンをたべた男をとこハお

よそ五千^{ごせん}人でござりまゝした。○ ^{四五} 是^{こゝ}にイエスハお弟子^{でし}た
ちを強^{あひ}て舟^{ふね}に比^ひせ向^{むか}ふ比^き岸^き比^きベツサイダへまづわたらせ
ご自分^{じぶん}ハひと^ごを^をおあへい^いかさされ ^{四六} ひと^ごを^を歸^{かへ}して
比^ひち祈^{いのり}のため^{ため}に山^{やま}へおいで^いあされまゝした ^{四七} 日^ひが暮^くれて舟^{ふね}
ハ海^{うみ}の^のあり^{あり}にあり^{あり}イエスハひとり^{ひとり}陸^{おろ}におゐ^ゐであされまゝ
^{四八} 向^{むか}風^{かぜ}比^ひため^{ため}に弟子^{でし}たち^{たち}が舟^{ふね}を^を掉^{こた}比^ひに^に勞^{つら}れた比^ひを^を御^ご覽^{らん}
あされ^あれて^れ曉^{あかつき}比^ひ四^よ時^じころ^{ころ}イエスハ海^{うみ}比^ひ上^{うへ}を^を履^あいて^{いて}おい^いであ
され^あれて^れ彼^{かれ}等^らを^を通^{とほ}り^りこさう^うとあされ^あると ^{四九} 弟子^{でし}たち^{たち}ハ^ハそ^そ比^ひ
海^{うみ}を^をあ^ある^るき^きあ^あさ^さる^るの^のを^を見^みて^て化^ま物^{もの}だ^だと^とおも^もつ^つて^て叫^{こゑ}び^びま^ま
^{五十} 弟子^{でし}たち^{たち}ハ^ハみ^みあ^あそ^それ^れを^を見^みて^てお^おそ^それ^れた^たあ^あら^らで^でご^ござ^ざり^りま
^{五十一} 是^{こゝ}に^にお^お弟^{でし}子^したち^{たち}に^に安^{あん}心^{しん}せ^せよ^よ我^{われ}である^{である}お^おそ^それ

るかとおふせられて五一 舟にお登りあさるゑと風ハやみまゝ
 たみお心こころ中なかにひどくおどろいてあやまみまゝた五二 それ
 といふハその心こころが愚頑にぶてパンは不思議ふしぎもさどらぬあらで
 ござりまを○五三 渡わたつてうらゲ子ザレといふ地ちにいつて舟ふね
 を岸きにつけ五四 舟ふねうら出でるゑとやがて人々ひとハイエスを知あつて五五 そ
 のあたりを遺れこらずうげまはつて病人びやうにんを床とこのまゝうついで
 イエスはおゑであさるゑとこゝをきゝだしてまゑりま
五六 した 何處どこでもイエスがおゑであさるゑとこゝは村むらでも邑まち
 でも郷さとでもその街市いちへ病人びやうにんを置おいてお衣服ゆいの裾すそにでもさハ
 らせてくださいと縁ゆかりがひまゝたそう志こころて捫さばるやどのをの
 はみお愈なほまゝた

第七章

パリサイ人ひととある學者がくしやたちがエルサレムエルサレムあら來き

てイエスのもとふあつまりました二 お弟子でしたちのうちに

汚けがれた手てをかそち洗あらいぬ手てでパンをたべるをのがあるはを

みておれを責せめました三 何なにといふにパリサイ人ひととユダ

ヤヤ人ひと々々ハみあむう一人ひとの言いひつとへ傳つとをまもつてその手てを

きよくあらねばたべません四 また街市まちりら歸かへつて來きて

も洗あらいハねバたべませんそのせうづき盃さかずきやわん鍋かまや床とこをあらふか

ど様さま々々人ひとと學がくしや者しやたちがイエスイエスに問とひまをにハああたの弟でし子しハ

どういふ譯わけでむう一のひとのつたへに志こころたがはずにあら

はずにパンをたべませう六 こたへておふせられませにハ

は

イザヤハ偽善者比あんどらさをさしてよく預言したこがあ
 るその録た言にみの民ハ唇にて我を敬へどもその心ハわ
 れに遠ざあり 人の誠を教どあして徒にわきを拜むとあ
 る 八 あんどらハ神比誠を捨て人の傳をまもるをあそち鍋
 あどをあらひいろくそのやうあまををを 九 またおふ
 せられまにハあんどらハ實自己の傳をまもらうと
 てよくも神比いまゝめををてるをのである 十 モーセハあ
 んぢ比父母を敬へまた父や母を罵るをのハ殺るべいと
 つたが 十一 あんどらハ一人ハ父や母にむらつてあんどら
 養ふべきをのハ「コルバン」をあそち供物であるといひさへ
 是れば事ぬでもよいといふ 十二 そりして人がその父や母の

ためにかにもむるまどをゆるさぬ 十三 六はとほりあんぢら
 ハみづうらをくへゑとてろは傳はたへによつて神うまのまどばをむ
 かしくくまたおやくまの類たぐひのまどをかむ ○ 十四 イエスマた
 ひどぐをよんでおふせられまむにハあんぢらみあわが
 言ことばをきいてさどれ 十五 外そとうら人ひとに入いるまのハ人ひとを汚けがむまど
 ハ出で來きぬが人ひとよりでゑまのハ人ひとを汚けがむはである 十六 聽きこえゑ
 耳みみはゐるまのハ聽きげ ○ 十七 イエスが人ひと々ごとをそかれて家いへにお
 はいりあされたときお弟子でしたちがたどへの意味あゝろをどひま
 したれば 十八 おふせられまむにハあんぢらもまだ悟さとらぬら
 あんでも外そとうら人ひとよ入いるまのハ人ひとを汚けがむまどのできぬま
 どを知らぬら 十九 それハ心こゝろにハ入いらぬ腹はらへはいつて廁せむへお

ちゑそうして食ふた毛のハ清められぬ 人より出ぬ毛の

こそ人^{ひと}を^{ひと}げが毛^け毛^けのである 二二 ひとの心^{こころ}うら出ぬ毛のハ惡^{わるい}

念^{おもひ}、姦^{くんにん}淫^{いん}、苟^{くりそめのいろ} 合^{ひとごころ}、兇^{ひとごころ}殺^{ころ}、 盜^{ぬそと}竊^{むさぶり}、貪^{あくるん}婪^{いぼたぎ}、惡^{いろ}心^{このみ}、偽^{ねたみ}、好^{そーり}色^り、嫉^{たうぶり}妒^り、謗^り、譏^り、驕^り、傲^り、

狂妄^{おろつこと} 二二三 ぬれらぬ惡^{あく}きまどはみる内^{うち}より出、ひとを^{ひと}げが毛

毛^けのである 〇 二四 イエスハあゝうらツロとシドンの境^{さかい}にお

いであされ家^{いへ}にはいつて人^{ひと}に志^しられまいとおほくめした

がお隱^{うくれ}あさぬことが出来^でませんであまうた 二五 その譯^{わけ}ハ

惡^{あく}鬼^きにつくれられた幼^{わらわ}い女^{むすめ}を毛^けつてをる婦^{をんな}がイエスハあどを

きいて來^きてそれ足^{あし}下^{もと}にひれふうらでござりませぬ 二六 あ

の婦^{むすめ}ハサイロピニシヤに生^{うま}れたギリシヤハ毛^けのでありま

したが悪^{あく}鬼^きをその女^{むすめ}よりおゝひだくあさぬまどをイエス

に鉢がひまゝた 二七 イエスハそれ迄迄のおふせられまはに
 しまづ兒女に飽むべきまどであることどもはパンをとつて
 犬に投ふハよろしくあい 二八 婦がまたへてまをしまはにハ
 主におふせのとかりでござりまはが犬も案は下にをつて
 兒女は遺屑をたべま 二九 イエスが婦におふせられまはに
 ハその言によつて歸れ惡鬼ハあんなぢ女あら出た 三十 をん
 あハその家にあへまゝしたまは惡鬼ハもえや出、むはめ
 ハその床に臥て居はをみまゝた 三一 イエスハツロとシド
 ン地をさつてデカボリス地をとつてガリラヤは海
 へおいであされまゝた 三二 人々聲は訥むをイエスはど
 ころへつれてきて手をおつけあさむことを願ひまゝたれ

ば ^{三三} イエスハひとぐををふれてそはをの外へつきて
行てその耳に指をさし入れまた唾をしてその舌にさはり
^{三四} 天を仰きあげいて「エツパタ」とおふせられましたはれを
譯ばひらけといふとでござりまは ^{三五} 是ぐにその耳がひ
らけ舌は絡がゆるんで正しくをいひだした ^{三六} 志た
エスがふれを人にいふとお戒めあされるとおいましめ
あさふなどあないひふらし ^{三七} ました ^{三七} ひとぐハひとくお
どろいてまをしまはにハおは人のをる ^{三八} 是とハみんあ善 ^{三九} 是
とである聾を聴させたり啞者ををのいせたりした
第八章 その頃あつまつた ^{四〇} 是のが澤山ありました ^{四一} が何も食
ふ ^{四二} 是のがあいらイエスが弟子たちをよんでおふせら

れまをにハ 二 我ハ六の大勢比ひとぐをあれむををや
 三日我ど、もに居たうら今ふんにも食ふのがあい 三
 一 飢たま、その家にくへをから途であやむであらうあり
 には遠方うらきたも比も何ふうら 四 お弟子たちがまたへ
 てまをしまをにハ六比野で何處でパンを買て六の人々に
 飽せませうう 五 イエスハパンがいくつあるうとおどひあ
 されましたまば七つとまたへまいた 六 イエスハ人々にい
 ひつけて地に坐らせその七つ比パンをとり謝してそれを
 わり人々比前ふおくためよお弟子たちよおやりあさふと
 お弟子たちは人々比まへにおきまいた 七 またちひさい魚
 がわづらばうりござりまいたそれも祝して人々比まへに

おげどおふ勞あはられまゝした 八 ひと く それを食たべて飽あきその肩うづ
をひろつて七ななつの筐かごにいれまゝした 九 ぶれをたべた色のハ
おおよそ四千人でござりまゝしたイエスハぶれをおろへし
かされまゝした 十 イエスハぶぐにお弟子でしたちと、もに舟ふね
にのつてタルマヌタ比な方かたへおいであされたところガ 十二 パ
リサイ比ひ人が出で、イエスをあ、ろみるために天てんうら比ひ休やす
徴しるしをえとめて詰かじまをじめまゝした 十二 イエスハ心こころ比ひうちにふ
ろくあげいておふせられまをにハぶの世よ比ひ人ひとハあぜ休やす徴しるし
をえとめぶ、われまことにかんぢらにつぐ休やす徴しるしハぶの世よ
比ひひとに必かなららずあたらられぬ 十三 イエスハそ比ひ人ひと々びをえあ
れてまた舟ふねにのつてむろふ比ひ岸きしへおわたりあされまゝした

○ ^{十四} さてお弟子たちハパンを奪つてくる此をわきれてた
 一 ^{十五} 個^{ひとつ}のパンが舟にあまませんであまました イエス
 がお弟子たちをいまゝめておふせられまことにハ氣をつけ
 てパリサイはひとの麩醇^{せんだれ}とヘロデは麩醇^{せんだれ}をつゝめ ^{十六} お
 弟子たちがたがひに論じていひまことにハおれハパンを奪
 つてお給ふてであらう ^{十七} イエスハそれを知ておふせられ
 まことにハおせれたがひにパンを奪つておぬふを論ずる
 まだ悟らぬおんちら此は、ろばまだ頑^{にぶ}い ^{十八} 目があつ
 ても視へぬお耳があつても聽^{きこえ}ぬ ^{十九} わが四千
 人に五つはパンをわりあたへたときその屑^{くづ}を幾^{いく}筐^{くわ}ひろつ
 たりまたへてまをしまことにハ十二筐^{くわ}でござりま ^{二十} また

四千人に七^かパンをわりあたへたときそはくづをいく筐^{かご}
拾^ひろつたりみたへてまをいまはにハ七^かろでござりまは
二一 イエスうれらにおふせられまはにハ何^{なに}さどらぬろ ○ 三三
イエスがベツサイダへおいてあされまいたればひと
警^{めくち}者をつれてきて手をおつけあさふことを願^{ねがひ}まいた 三三
イエスハめぐらの手をおとりあされて村^{むら}外^{そと}へはれて出^で
その目^めにつばきをして手^てをつけてあにり見えるろとお問^{とひ}
あされまいた 二四 めくらが目をあげてわたくハあの人^{ひと}々^ぐ
があるくはをみまはが樹^きはやうでござりまはとまをいま
二五 した そをりらまた兩^{りやう}手をその目^めにつけそはをを
せあさふとあつてまべては色のが明^{あき}らりに見^みえまいた

二六 そのをの内うちへうへらせておふせられまをにむらの村よ
 入いるかまたあは村むらの人ひとよもえあをあ○ 二七 イエスがお弟子で
 たらをおつれあされてカイザリヤピリピは村むら々へおいで
 かさ途とちでどふておふせられまをよひとくハわれを誰だれ
 であるといふ二八 なたへてまをいまをよハバプテスマの
 ヨハネであるといふ色のもありエリヤであるといふ色の
 もあり預言者よげんしゃは一人ひとりであるといふ色のもござりまを 二九 イ
 エスがお弟子でたちよおふせられまをよ汝曹なんぢらハわれを誰だれで
 あるといふ三十 ペテロがなたへてまをいまをよハあなたハ
 キリストでござりまを 三十 イエスハうれらを戒いまめてわが
 ぶを誰だれよもえあをあとお命めいじあされまいた○ 三一 また人ひと

の子こはうらあらずおなくの苦痛くるしみをうけ長老とよりと祭司さいいは長をきと學まな
者しやどもよをてられうつ殺ころそれて三日みつひは、ちよ甦よみがへるよとを志
めいだされまいた三二 あきららうよそのことをお志めいあさ
れたよばペテロペテロハイエスをおさへて諫いさめだくまいた三三 イ
エスハ回顧ふりかへつてお弟子でしたちをみてペテロをいま志めてお
ふせられまよハサタンよわが後うしろよ退ありぞげあんぢハ神かみはこ
どをおもえずうへつて人ひとのことをおもふ○三四 人ひと々々とお弟で
子こたちを呼よんでおふせられまよハ毛けくわれよ従したがはんどお
もふよのハ己おのれををて、そは十字架じふじかをおふて志たがへ三五 何
かれバ生命いのちを全またう志やうとをるよのハそれを失うしなひわが
ためまた福音ふくいんはためよ生命いのちをういあふよのハそれを得とる

で何らう三六 も一人が世界中を得てもそれ生命を失うか
らば何かん比益るきがある三七 り また人ひとハ何かにをもつてその生命いのちに
易くる三八 ろ 姦惡くんあくある二 比世よにおいて我わどわが言ことを耻はづる三 之の
人ひとの子こもまたそれ二 比よきよき使つと、もに父ちちの榮さかえをもつてく
るときに二 比よれを耻はづるであらう

第九章

イエスがまたおふせられまをにハ我わまこと二 に告つげん
ふ、に立たつをの、うち二 に神かみ比國くにが權威けんゐをもつてくる比よを見
るまでは死しふぬ二 比よがある二 ○ さてそれ二 ら六日むつ比よらに
イエスハペテロヤコブヨハネをつれて人ひとをさけて高たかい山やま
にお上のぼりあされたところ二 がそのまへでお容まが貌たが三 かはり三 お
衣服めいものハ二 ろ二 やいて雪ゆきのやう二 に眞白まっしろに二 かり世よの中なか比よ漂たらいも

新約聖書 馬可傳第九章 自第八章卅六至第九章三節 五十五

そうハ志ろく出來まいとおもふ事とでござりまいた 四 エ
リヤとモ―セもどもふあらはれてイエスとおはふ―を志
て居をりまいた 五 ペテロハまたへてイエスふまを―まをふハ
ラビ私共わたしどもがふ、ふ居をるは宜よろこうござりまをわたく―どもふ三
此いほり虚をつくらせてくださりませ―一つハ主しゆ此ため一つハモ
―セ此ため一つハエリヤ此ためふいた―ませう 六 あまり
おそれ何なにをいつて宜よいらわらぬ事ことやうまを―た
のでござりませ 七 此うちふ雲くもが三人さんをおほひそ此雲くも
らこハわが愛あい子こかりこれふ聽きべ―といふ聲こゑがござりま―
た 八 やがて弟子でしハみまはせとイエスと自分おん此ころはひと
りもみえませんであはまいた 九 山やまをくだふときふイエ

スハかれらにいひつけて人の子がよみのへ魁ひとふまでハあんどら
 みたことをひとにうたるおとふせられまいた + お弟子
 たちハそれ言ことばをまもりうつたがひに論ろんじてまをいませに
 よみがへふとを何なにごとであらう 十二 イエスにとふてまを
 ませにハエリヤハ先さきに來きたふべいと學がく者しゃがまをせはハどう
 いふことでござりませか 十三 こたへておふせられませにハ
 まことにエリヤハさきにきて萬ばん事じをあらためまた人ひとの子こ
 よついでハそれ様さま々々くるいみをうけうつ輕くろいめらるゝ
 ことが出るゝてある 十三 けきどもわれあんどらよ告つぐエリ
 ヤハもえやきたはよこの人ひとよついで出るされたどなりよ
 人ひと々々ハ氣き恣まあゝらひかゝを去さた 十四 イエスがお弟子でた

ち此どころへきてりれらがお不ぜい此人々よとままりれ
 たところと學者たちと論を志てをる此を御覽かされま
 た十五 人々ひとびとをよイエスをみておどろき趨よつて禮をいま
 した十六 學者がくしや多ちふとふとおふせられまをみ弟子と何ごと
 を論ずるか十七 ね不ぜい此うち一人ひとりのみ多へてまをいまをよ
 ハ先生私ハ色のいはぬ惡鬼よつかれ多子成つれてまあり
 ました十八 惡鬼あくま此つくときハあげたふされ沫をふき齒を切
 志ばつて勞えてまをみれをおひだを多とをお弟子たちふ
 ねがひましたが出来ません十九 みたへてねふせられまをふ
 ハあ、信仰おんこうあき世りあいつはでわれハあんなちらと、もふ
 あるかいつはであんなちらを忍ぶ多とかその者をつれてこ

い ^{三二} その子をつれてくると悪鬼ハイエスをみてはぐよそ
れをひきつけさせまよふれば地よふれて轉で沫をふき
まよふ ^{三二} ^三 是れ父よおよづ祢あされまはよいつごろあらう
うあつたの父がまをいまはみハ幼きときららでござりま
は ^{三三} 悪鬼がたひぐこれを火はかりや水はかりよあげい
れて殺さうといたよまよふあかよまよお出来あきあから
ハ私共をあえれんでおよすげください ^{三三} イエスがおふせ
られまはよあんぢハまよ信ずるこが出来あからば信ず
るまのよはあよこでもできぬといふことハあ ^{三四} その
子ハ父ハまよこをあげ涙をかがして申まはよハまよ
わよくハ信よまはまよよくハ信仰のあいのをおよまけ

ください二五 イエスハ人々のはくまあつまゐのをみて惡鬼あくま
 を務めておふ務られまをよハ啞者おふよ志て聾つんぼある惡鬼あくまよわ
 れかんぢよ命めいず出で、まよこのをのよ入いるか二六 惡鬼あくまハさげ
 んでそのをのをひどくひきつけさせて出でまよれば死し
 だをの、やうよありまよ人々ひとハあれハもう死しんだとま
 をよまよ二七 イエスがその手てをとつてお起おこしかされると
 そのをのハよちまよ二八 イエスが家いよお入はいりあされよ
 ときお弟子でしよちがひそよよとふてまをよまをよハわよく
 一どもがよれをおむだせぬ此こハどういふわけでござりま
 せよ二九 ぶよへておふせられまをよハ此こ類たぐひハ祈いのりと斷食だんじき
 でかければおひだまよよは出で來きぬ三〇 ぶ、を立たてあらが

せられまはよハ首くちらとからうとおもふものは凡まづて此人ひとは使つか
役えきびと、かゝるであらう 三六
まゝひとりをさかひの孩提をさかひをとつてその
かゝるよ立たせそれを抱いだいておふせられまはよハ 三七
おふよそ
わが名なのためよあをさかひのやうか孩提をさかひのひとりをさかひをうけるものは
まはよち我われをうけるものであるまた我われをうけるものはま
かち我われをうけるのではない我われをつらはしたまはよちをうけ
るのである 〇 三八
ヨハネが来たへてまをよまはよハ先生せんせい私わたくし
共どもよ来たがハぬえのがあかたの名なによつて悪鬼あくまをおひだ
まのを見みましたが私わたくし共ども従したがいませんらそれを禁さむました
三九
イエスがおふせられまはよハそれを禁さむるかふせかれば
わが名なによつて不思議ふしぎあわざをおこさつて輕かろく々くくわれ

を悪^{わる}くいひかたみどのできる色のはかい^{四十} されに敵^{てき}たは
 ぬ色のはまきに屬^つ色のである^{四一} かんぢらキリストにつく
 色のとてわが名^なたために一杯^{いっぱい}比^ひ水^{みづ}でもかんぢらに飲^{のみ}せ
 ぬ色のは我^{われ}まことにかんぢらにつげんその人^{ひと}は報^{むくい}をうま
 かえぬ^{四二} またおほよそ我^{わが}を信^{しん}ずぬ少^{ちひさ}い色の、一人^{ひとり}を礙^{つまづ}あ
 せぬ色のはそれ首^{くび}に磨^{ひき}をあけて海^{うみ}の中^{なか}へあげいれられる
 方^{ほう}がその人^{ひと}のためになやよあらう^{四三} 若^{もし}かんぢの一手^{ひとて}があ
 んぢを礙^{つまづ}あせぬからばまを斷^{きり}され兩手^{りやうて}あつて地獄^{ぢごく}比^ひ消^{きえ}
 ざる火^ひにゆくよりは殘^{うた}缺^はで生命^{いのち}にいるはうがかんぢ比^ひた
 めによいまどである^{四四} そこに入る^い色の、蟲^{むし}ハつきず火^ひハ
 消^{きえ}ぬ^{四五} 色かんぢ乃^な一足^{うたあし}があんぢをつまづあせぬからば

火を斷きりされ兩足りやうあしあつて地獄ぢごくはきえざる火にかげいさら
れるよりは跋あしかへで生命いのちにいるはうがあんぢはためによい 四六
そこにいるをの、蟲うじはつきず火ひはきえぬ 四七をいあんぢの
一ひと眼まなこがあんぢをつまづあせふならば火を抜ぬきだせ兩眼りやうまなこあ
つて地獄ぢごくは火ひにかげいられぬよりは一ひと眼まなこで神かみの國くににい
るほうがあんぢのためによい 四八そこに入いるをの、蟲うじはつき
ず火ひはきえぬ 四九あせあまはをべて人ひとは火ひををつて鹽しほつけ
られをべて供物そなへものの鹽しほををつて鹽しほつけられぬ 五十鹽しほはよいを
のであるが鹽しほがもいそは味あじをうまふからバどう去いてそ
れに味あじをつけるはどが出來でやうの汝曹なんぢら心こころはうちうちに鹽しほを有たも
てまたたがひに睦むつましく去いて和やそらげ

第十章

イエスの名を立たつてヨルダン河向むかひをどかつてユダ

ヤ境さかいはうちにおいであされまゝたればおなくは人々ひとが

集あつつて來たゆゑ例いづもはごとくその人々ひとに教しをあされまゝた

二 パリサイ人はひとが來てイエスを試こころみて問まはすに人ひとの妻つま

を出だしてもよいものでござりませぬ三 またへておふ務つとられ

まをにハモ―セハあんぢらに何なんといひつけた四 またへ

てまを―まをにハモ―セハ離縁りゑんじやう狀じやうを書かけてやつてあら出だせ

ぬを許ゆるまゝた五 イエスがまたへておふせられませぬにハ

モ―セハあんぢらが心こころは不情つれあいによつてぬの律法おきてを立たてた

である六 志こころを―開關ひらかせるはじめに神かみハ人ひとを男をとこと女をんなとにお造つく

りあされた七 またゆゑに人ひとはその父母ちち、ははをはあれその妻つまに

合あつて 八 二人ふたりの毛けのけが一體いつたいどどかかののであるであるされされば二ふたつでハ
 かく一體いつたいである 九 夫おとこは由よゑゑに神かみの耦よめををせたまふたた毛けののは
 人ひとが夫おとこれを離とかかしてハはからぬ ○ 十 家いへにをつて弟子でしたちが
 また夫おとこののことを聞きましたれば 十二 イエスががおおふせられま毛け
 にハはおおふよその妻つまをを出だして他たの婦むすめをを娶めとるのハはその妻つまに
 對たいして姦淫かんいんををおおここふのではある 十二 又また婦むすめがが毛けををその夫おとこ
 を出だして他たへ嫁よめかららばその婦むすめも姦淫かんいんををおおここふのではあ
 る ○ 十三 イエスにに問とはなれるために孩提こどもををつつれてまるりました
 ればお弟子でしたちはそのつつままをを禁いめました 十四 イ
 エスハはそれを御覽ごらんああされてて怒いかりをふくんでおふせられま毛け
 にハ孩提こどもををわれれに來らせよよそれを禁いめますの神かみの國くにに居をるる

のは此やうかえのである十五 まことにて我わらに告つげ
 およそ孩こ提た此やうにかつて神く此國こをうけぬものは此れ
 に入るまとは出来でぬ十六 そうおふせられてそ此孩こ提たを抱だいて
 手てをそ此上うへに按のせてお祝あいさされまいた十七 ○ イエスが途みちへ
 お出であけあされると一人ひとりの人があけて來きて跪ひざまづいて問とま
 には善よ先生せんせい私わたくしの限かぎあさ生命いのちを嗣つぐためには何事なにことを志こころたらよ
 ろ志こころうござりませう十八 イエスがおふせられまはにえ何なに
 われを善よといふ一人ひとりは不よに善よ色のハかいそれハ此れ
 ち神かみである十九 誠まことハあんぢが知しりである二十 姦淫かんいんを
 れ殺ころさる偽いつはり此證あかしを立たつゑあはま拐かぎ騙だまさるれ汝なんぢ此父ちちと母はは
 を敬うやまへ二十 又またへてまをくまはにハ先生せんせい此れら此れハ

るよりハ駱駝らくたヲ針はりニ孔あなを通とおほるハ一ひとつて易やすい二六 お弟子でした
 ちは甚ひどくおどろいてたがひに申まをまをしにハさらバ誰だれが救まをれ
 るおとができませう二七 イエスがお弟子たちをみておふ
 せられまをしにハおまをしハ人ひとにハ出で來きぬおとであるが神かみに
 いてハさうでかい神かみにはお出で來きぬおと二八 是こでペテロがまをしよハ私わたし共どもハ一切もををして、あふた
 に從したがひましうた二九 イエスがおまたへておふせられまをしにハま
 ことにかんぢらに告つげん我われと福ふく音いんはために家いへまたハ兄弟きやうだいま
 たハ姉い妹まいまたハ父ちちまたハ母ははまたハ妻つままたハ兒こ女どもまたハ田た
 疇はとを捨すてるをのハ三十 おの世よにて百ひやく僧そうをうけぬをのハかいを
 あそち家いへ兄弟きやうだい姉い妹まい母はは兒こ女ども田た疇はとと、もにうけまた後のちの世よに

を限かぎりかき生命いのちをうけるであらう 三二 けさどもおなくは先さき
 此このハ後あとにかり後あとのこのが先さきにかゝであらう ○ 三三 さて
 エルサレムへ上のぼる途みち中ちゆうイエスハお弟子でしたちに先さきだつてお
 いでかきまゝしたがあれらハおどろきあつおそれて去いた
 がひまゝたイエスハ十二にん人をおつれかされて今いまに己おのれの身こ
 のうへふ及およんでくるふとをつげておふせられままにハ 三三 わ
 くらハエルサレムへはほつて人ひと子こハ祭さい司しは長ながと學がく者しゃた
 ちにころされあの人ひとたちを死し罪ざいにさだめ異い邦ほう人にんに
 わたし 三四 またふれを嘲てう弄ろうし鞭むちうち唾つたきしあつ殺ころむであらう
 さう去いて第だい三つかめ日にちに甦よみがへるであらう ○ 三五 ゼベダイこ子こヤコブ
 とヨハネがイエスに來きてまをしままに先せん生せいどうぞ私わたくし共どもの

願望ねがひをさいてください三六 おふせられまことにハかんぢらに
 わが何をなにをなるらふとを願ふねがふ三七 又たへてまを去まことにハあ
 なたが榮さかえをさかうけあさふとさにわたくしどもひとりの一人をそ
 の右みぎに一人をその左ひだりに坐まはせてくださいませ三八 イエスが
 ふせられまことにハかんぢらハ自分じぶんでぬがふふとを知しぬか
 んぢらハわが飲のむところの杯さうづきのみわが受うけるところのバプ
 テスマをうけるふとが出来できる三九 あれらがまをしまことに
 ハ出で來きまをイエスがおふせられまことにハかんぢらは實じつに
 わが飲のむところの杯さうづきのみまたわが受うけるところのバプテス
 マをうけるであらう四十 けれどもわが右みぎにまハるふとはわ
 が與あづふべきところであつたそなへ備そなへられたをのハあたへられ

るであらう 四一 十人の弟子は此れを聞てヤコブとヨハネを
 憤どほりまゝた 四二 イエスのあれらをよんでおふせられま
 せにハ異邦人の君と見える色のハその民を治めまた大か
 る色のどもハその上に權威をふるふとハかんぢらが知
 つてをふどころである 四三 けれどもかんぢらのうちでハさ
 う志てハかんぢらぬかんぢらのうちで大からうとおもふ色の
 ハかんぢらに役れる色のとあふであらう 四四 またかんぢら
 のうち首とあらうとおもふ色のハせべての人の僕とある
 であらう 四五 かせかれば人の子の來のも人をつゝふため
 ハかくあへつて人に役れまたおかくの人に代つてその生
 命をせて、贖とあるためである 四六 それあらエリコへい

さイエスが弟弟子たちとお不ぜいの人々どもにエリコ
 をおであけあさふとさテマイの子のバルテマイといふ警
 者が路傍に屯はつてをのをもらつてをりまうたがナザ
 レのイエスだと聞て呼んでまをしませにハダビデの子イ
 エスよ私を恤れんでください四八 おなくはひとが黙れ
 と禁まうたれハあやしくよんでダビデの子よ私をあえれ
 んでくださいとまをしました四九 イエスハお立どまりあさ
 れてあのをのをよべとお命じあされたれば人々がめくら
 をよんでまをしませにハ安心志てたちあさいイエスが
 前をおよびあさふ五〇 めくらハその表衣を屯て、立てイエ
 スのをどにまゐりまうた五一 イエスがゐたへておふせられ

まをにハあんぢハ私われに何なにを去なてをらひたいあめくらがま
をいまをにハ主まゆよ目めが見こえるやうにかりたうでざりまを
五二 イエスがおふせられまをにハ行ゆけあんぢの信しん仰かうがあんぢ
を救すくつたをぐにあの色のハ見こえるやうにあつてイエスに
従まじつて途みちをいさました

第十一章

橄欖山かんらんざんのベツパゲとベタニヤにゆきエルサレム

にちあづいたときイエスがふたりの弟子でしをつゝそそうと
去なて 二 おふせられまをにハあんぢら向むかふの村むらへゆけそこに
入はいらばやがて人ひとのまだ乗のち奴ろ驢ば馬ばの子こが繫つないであるのをみ
るであらうそれを解といて牽ひいてこい 三 もい誰だれああんぢらに何なに
そうをるあといふ色のがあらば主まゆの御用ごようであるといへさ

らバ屯ぐにそれをこゝへつゝは屯であらう 四 二人ハ行て
 外の岐路に驢馬ろばがつかいである此をみてそれを解と
 五 そこに立てをる人々ひとぐ此うち或あるのが申まをしま屯にハみ此
 驢馬ろば此子を解とてだう屯るあ 六 お弟子でしたちハイエスのおい
 ひつけあされたどかりにまをしま屯たればゆるしました
 七 於弟子でしたちハ驢馬ろばの子こをイエスに牽ひてきて於のれの衣き
 服ものをそのうへに屯きはつたればイエスはみれに於乗のりあさ
 れました 八 人々ひとぐ於なくハその衣服きものを布いきまたハ樹きの枝えだを
 伐きて途みちに屯き 九 あつ前にゆき後に屯たがふひとぐが呼よ
 はつてまをしま屯にハ雨あめザはよ主しゅの名なによりてきたるを
 のハ福ふくあり 十 主しゅの名なによりてきたるわれらの父ちちあるダビ

デの國くにをさいはいはひあり至高いとたかさどころに所ところザはよどまを
 ままた○^{十二} イエスハエルサレムにおいておされ神殿みやには
 いつて遺のちらずおみまはくおされをはや暮方くれがたにありまいた
 ろら十二人にんとゞもにベタニヤへおいでにありまいた○^{十二}
 あくる日ひベタニヤのら出たどさイエスが飢ひもむくおありお
 さいまいた^{十三} はるのに葉はのあふ無花果いちざくの樹きを御覽ごらんおされ
 それ樹きにふにあらうとておいでおされたところ葉はの
 不ふのふにもみえませんであまいたふれの無花果いちざくのどさ
 であいらでござりませ^{十四} イエスハふの樹きにむあつて今いま
 よりのちいつまでもおんちの實みを食くむのはあいとおふせ
 られまいたがお弟子でしたちハふれをさくまいた○^{十五}
 エルサ

レムにまゐりイエスハ神殿いへにはいつてそのあゝにをる賣うり
 買かひむるをのを神殿いへよりおひだし兌銀りやうがへむるをの、案だいと鴿ととを
 うるをの、椅子いすをたふし十六また器具うつものをまつてみやを通とふ
 ぶをおゆるしあさりませんであま十七またこの人ひと
 たちに教おしへてたふせられまむにいわが家いへは萬國ばんこくの人ひとの祈いのり
 の家いへとどあへらるべしと志こころるされたでハかいの志こころあるに
 かんぢはぶれを盜賊ぬそびとの巢ねとあした十八學者がくしゃと祭司さいしの長なががぶ
 れをさいてどうの志こころてイエスをほろぼそうとはありま志
 たがおそれましたその譯わけハひと十九みあその教をいへにおどろ
 いたあらでござりまむ○日ひがくれてあらいエスハ都みやこを
 出で、おいであさりました二十明あける朝あさいちじくの樹きをとふる

どその根ねあらまどぐく枯かれたのをみまうた三 ペテロが
おもひだしてイエスにまをしまをにハラビ御ご覽らんあさいお
誑のろいあされたいちじくは枯かてしまいまうた三 イエスがまた
へておふせられまをにハ神かみを信しんぜよ三三 まことにかんぢら
につげん誰だれでもその心こころに疑うたがはずにそのいふまどは必かならず
あると信しんじてみまの山やまにうつりて海うみに入はいれといはゞそのま
どばのとかりに二四あるであらう みのゆゑにわれかんぢら
につげんおおよそ祈いのるとさその願ねがふまのは必かならずえると
信しんずるからあらずえらう三五 またかんぢら立たてい
のりをするとさまゝひとを恨うららむまどがあらばまれをゆ
るせそのわけハ天てんにいままかんぢらの父ちちにかんぢらもあ

やまぢをゆるさるるためである 二六 もくかんどちらゆるされ
 ぬからば天てんにいままをかんぢらの父ちちもかんぢらのあやまぢ
 をゆるしたまはぬであらう 二七 ○ またエルサレムへまゐり
 ましたがいエスが殿みやをおあるさあさふとき祭司さいいの長きさと學がく
 者しやたちがきて 二八 まをくまをにハかんぢハかんの權威けんをを
 つておのふとををるの誰だれがふのふとををるためにかんぢ
 にふの權威けんをあたへた 二九 イエスがふたへておふせられ
 まをにハ我われも一事ひとごとかんぢらにとふふとがあるそれを我われに
 したへるから我われもかんぢらにかに此けん權威けんをもつてふれを
 かせといふふとを告つげやう 三十 ヨハネのバプテスマハ天てんより
 の人ひとよりあわきにふたへよ 三一 夫ひとの人々ひとぐハたがひに論ろんじて

まをしまをにもく天てんよりといえッさらばかにゆゑこの人ひと
 を信しんぜぬうといふであらう三三もく人ひとよりといえッ民たみをお
 それまいたおぜおれば人ひと々々みおヨハネを預言者よげんしゃといいたく
 まいたうらでござります三三とうくおたへて知らぬとま
 をしまいたイエスがまたへてわれもかにの權威けんいをもつて
 おれをお花おかんぢらに語ことばぬとおふせられまいた
第十二章 イエスが譬たとへをもつておをかかされまいた或人あるひと
 が葡萄園ぶどうのうゑをつくり籬まのきをめぐらく酒榨さうぶねをまくらへ塔ものえをたて
 農夫ひやくしやうにうしておの國くにへいつたが二時ときがきたあらふだう
 ばたけの實みをうけとぶために僕しもべを農夫ひやくしやうにつらはいたとこ
 ろが三ひやくさようどもがおれをとらへ打撲うちたたくてむかしく

あへらせた四 またあゝの僕しもべをあらにつゝあはしゑどころ
 が農夫ひやくしやうどもがそれを石いしでうち頭にあたまに傷きずをつけそづゝあゑめて
 あへした五 また他のほかのををつゝあはした六がそれを殺ころした
 ならずにおなくつゝあはした七が打うたり殺ころした六こゝに
 ひどりの愛子あいこがあつたがあゝの我子わがこハ散うやまふであらうといつ
 てその子こをつゝあはしたところ七が農夫ひやくしやうどもがたがひにい
 ふにハあゝの嗣子あとつぎであるサアあゝを殺ころそうそうむれバ身しん
 代だいハわれらのをのである八といつてそれをとらへてあろ
 一葡萄園ぶどうばなの外そとにむてた九 あゝらハぶだうばたけの主人あるじは
 どうむるであらうかならず必かならずあ來きて農夫ひやくしやうどもをうちあろほしぶだ
 うばたけを他ほか人ひとにあたへゑであらう十 工匠いへつくりはむてたる

石は家の^{いへ}の^い礎^いの^{かや}首^い石^いと^いか^れり^{十二}。これ主^{しゅ}の^かく^たま^へに^あら^はす^こと^にま^たわ^きら^の目^めの^あや^の奇^あと^にま^みと^ころ^のあ^りと^まる^され^たの^をま^だ讀^よぬ^あ。十二。あ^まら^ぬの^たと^へハ^己の^あの^れの^あと^であ^ると^まつ^てイエス^をと^らへ^やう^とま^たが^ひと^くを^おそ^れて^イエ^スを^えか^れて^行ま^した。十三。あ^れら^はイエス^をそ^の言^{ことば}によ^つて^おど^いい^れや^うと^して^パリ^{サイ}の^ひと^へ口^デの^とも^がら^のう^ちよ^り數^た人^{にん}を^つあ^そし^まま^た。十四。つ^あは^された^をの^ども^がイエス^のと^ころ^へ來^まて^まを^しま^まに^ハ先生^{せんせい}あ^かた^ハま^こと^で誰^{だれ}も^お偏^{かた}よ^りあ^さら^ぬこ^とハ^私共^{ども}存^{ぞん}じ^てを^りま^まあ^かた^ハ貌^{うぶな}み^よつ^て人^{ひと}を^お取^{とり}あ^さら^ず誠^{まこと}を^もつ^て神^{かみ}の^{みち}を^おを^しへ^あさ^らぬ^あら^でご^さり^ます^さ

て貢こぼせをカイザルをこめに納をこめふハ宜よろ志しうござりますよろうござり
 ざりません十五うわたくゝども十六おれを納をこめませうをこめう納をこめますまい
 う十五イエスハそのまことであいふを志しつておふせられ
 ませにハおぜわれをあいろ試まるうデナリをわきにをつてきて見み
 せろ十六それををつてまわりましたそこでおふせられませ
 ンハおの像かたちと號しるしハ誰だれであるうまたへてカイザルでござり
 ますとまをした十七イエスがおふせられませにハカイザル
 の色のハカイザルにうへ神の色のハ神かみにうへせうれら
 ハおれをおどろさました十八○復生よみがへりハいといふサドカイ
 のひとがきてイエスにどひますにハ十九先生せんせいモ―セハわた
 くゝどもに人ひとの兄弟きやうだいがもと子こあくまて妻つよをのこして死いか

バその兄弟きやうだいそのつまをめぐりて兄弟きやうだいの裔あひをたつべしと書くみ
 ておきまたたが二十 六、七人の兄弟きやうだいがありまゝたが兄あにが
 妻つまをめぐつて子があつて死しに 二人ふたりめをのが六れをめぐ
 どりまた子こがあつて死しに 三人さんにんめもまたそのとがり七人しちにん
 皆みんな六れをめぐつたが子こがあつて終おしまひにその婦をんなも死しにまゝた
 復生よみがへりのときうれらがよみがへるからバその婦をんなハ誰だれのつ
 まどあるでござりませううおせかれハ七人しちにんともにおれを
 めどりまゝたうら二四 イエスまたへておふせられますにハ
 かんぢらハ聖書せいしょも神かみの力ちからもまらぬあら誤あやまるでハあいう二五
 よみがへるときハ娶よめとりもせず嫁よめりもせず天てんにある使つかひたちのや
 うである二六 死しんだをの、よみがへるまどみついてハモ―セ

の書棘中の卷に神ありにありたりてわれハアブラハムの神
 イサクの神ヤコブは神ありといひたまふたことをよまぬ
 神ハ死だえの、神でハかい生をの、神であるあんぢ
 らはおないふあやまつてをふ○ 學者のひとりがこの議
 論をきいてイエスのこれふよくおこしへあされしこと成
 まつてまゝ聞てまをしまむふハすべてこの誠のうちで孰が
 首でござりまするイエスがおこしへあされますふハす
 べての誠のあらはイスラエルよさけ主あふわれらの神
 ハすあそち一の主ありあんぢ心をつくし精神をつくし
 意をつくし力をつくし主あふあんぢの神を愛すべしこ
 れハ誠のうらである 第二もまたあれふおあじやうで

己おのれのごとくふんぢの隣となりを愛あいはべしまれよりおおないあふいい
 ましめのあい
三三 學者がくしやがイエスを申まをしますふの善ようを先せんせい生せい
 あかた神かみはすあひち一ひつふまてやうふ神かみあいとおふせられ
 たのはまことでござります三三 また心こころをつくいち智ち慧ゑをつく
 い精せい神しんをつくいち力ちからをつくいてこれを愛あいしまたおのれのご
 とく隣となりをあいすふはすべての燔せん祭さいと供物ものよりもまさりま
三四 イエスはそのわけのわらつたまたへをごらんあされ
 ておふせられますにいかんぢのかみの國くにより遠とほくあいまの
 とさあらいだれもイエスに問とひえふをのいござりませんで
 ありました○三五 イエスが殿みやにあつて教をあされるとさま
 たへておふせられますにいかぜ學者がくしやはキリストをダビデ

の子こといふ三六 ダビデハ聖靈せいれいふ感かんじて自みづから主しゆわが主しゆふい
 ひけるハわれふんぢの敵てきをふんぢの足あしの下したにおくまでハ
 わが手ての右みぎに坐ませよといふ三七 うくのどなりダビデハみづ
 ちられを主しゆととふへたさればどう志こころてその子こであるう
 おやくの人々ひとハよろこんでイエスにさゝまた三八 ○ イエ
 スガをいへをふされるときおふせられまをにハ長ながい衣服いふく
 をきてあるき市上ちまたでひとの間安やすや三九 會堂くわいどうの高坐かうざふるまひ
 の上坐かみざをのみ四十 またやもめの家いえを飲のいつはつて長ながい祈いのり
 をとる學者がくしやをつゝいめふの人ひとたちハをつともきびくば
 つせられるであらう○四一 イエスが賽錢箱さいせんかぶにむうつて坐まつ
 て人々ひとの錢ぜにを箱はこにいれるのを御覽ごらんふさるふおやくの富とみる

ひとくハ澤山たくさんあげいれまゝたが四二ひとりの貧まつい嫠婦やもめが
 さてレプタふたつをかげいれまゝたあれハ四厘よりんほど小あ
 たりまを四三イエスハお弟子でたちをよんであふせられまを
 小まこと小わきあんぢら小つけん箱えい小あげいれたをべて
 のひとくよりもあをんなのまづい婦をんなハおをんななくあげいれた四四
 あぜかれバあの人ひとたちハその餘あまるところをを入れこの婦をんなは
 その乏さかいところよりそのをべてををち身代みんことくく
 入いれたをらである

第十二章

イエスが神かみ殿やををでうけあさふとひとりのお弟で

子こがまををまををハ先生せんせいで覽らんあさいあをの石いしあをの家いへハあんと盛さかんあをのでハでざりませんあ二イエスがあをたハてお

ふせられまをにハかんぢらふの大おおいおふ家いへをみるあ一ひととつ
 の石いしを石いしの上うへにくづされずにハ遺のこまい 三 イエスが橄欖山かんらんざん
 で神かみ殿やにむうつてお坐まりあされたときペテロヤコブヨハ
 ネアンデレがひそりに間まてまをしますにハ 四 いつあのお
 とがござりますうまたすべてあのことのあるときハどう
 いふ休やす徴しるしがあるあわたくしどもにお知しせください 五 あた
 へておふせられまをふハ人ひとふ欺あざむかれぬやうつゝゝめ 六 あ
 ぜかれバおなく比ひひどがわが名なをいつハつてきて我われハキ
 リストであるといつておなくの人ひとをあざむくであらう 七
 かんぢら戦いくさと戦いくさは風聲うへざをさくときおそれるあふれらたあ
 どハみああるべきあどであるけれども終をへりハまだあぬ 八 民たみ

新約聖書 馬可傳第十三章 自三至八節

八十九

ハおこつて民たみをせめ國くにハ國くにをせめまたどころくふ地震しん
 があり飢饉ききん騷動そうどうがあるであらうこれらハ困難くるんはじめで
 ある九 かんぢらみづゝあつゝ、九 志めおせおまバかんぢら集しゅう
 議所ぎじよふわたされまた會堂くわいたうでむちうたれ且證かつあつをむるためふ
 わがふとふよつて宰つうせや王わうはまへふひきいだされるであら
 う十 そう志て福音ふくはまづ萬民ばんふはべつたへられおけれバ
 ならぬ十一 毛けかんぢら十一をひさわたを毛けのがあらバまへ
 たより何なにをいそふと考かんがへまた慮しづふおたゞそれ時ときたまふと
 ころはふとばをいへおせおれバ毛けのいふものハかんぢら
 でおかく聖靈せいれいである十二 兄弟きやうだいハ兄弟きやうだいを死しふわたへ父ちちハ子こを
 わたへまた子こハそれ父母ちち、ははふさあつてこれを死しあへめ十三

またあんぢらハわが名なふよつてをべてのひとにくま憎れるで
 あらうけれども終をハリまで忍しのぶをのハをくはるゝふどができ
 るであらう十四預言者よげんダニエルいやが言いたところの殘暴あつそふくむ
 べきをのが立たつまじきところふ立たつをみるからバよむをのよ
 くおもふべし十五それときユダヤやまふをるをのは山やまふのがれよ
 屋上やねのうへふをるをの家いへふくだふあまた物ものをとりふ
 その家いへふ入いるか十六田たふをるをのハその衣服きものをとりふあへ
 るか十七その日ひふハ孕そらめるをのと乳ちをのまじふ婦をんなハわざをひ
 かふとである十八あんぢら冬ふゆふ遁ふげふふとをのがれるやうふ
 祈いのを十九その日ひふハあやみがあらうくのごときあやみハ
 神くみのををつくりはじめたまふた世よの始はじめより今いまふいたふ

まであつた。いとハかいまた後のちふもあるまい。 二十 も一主いぬその
 日ひをそくかくまたまをぬからバ一人ひとりもそくはるゝ。そのハ
 あらうけれど、主いぬは選えらみたまふたところのえらまれた
 えのゝ、ためにその日ひをそくかくまたまふであらう。 三 その
 ときも一キリストハ、いありありこふありといふもの
 があるとも信いんずぬ。 二三 かぜかれバ偽にせキリスト偽預言者よげんじやが
 おこつて休徵えゐるしと不思議ふしぎを行わざをおこさひあざむく。いとが
 來きればあざむくであらう。 二三 かんぢら慎つゝめよ。まへもつ
 てかんぢらふ。 二四 悉のむらふれをつぐ。 二四 そのとき、いと患難くわんなんのゝ、ち日ひ
 ハくらく月つきハひありを失うしなひ。 二五 天てんの星ほしハおち、天てんの勢いきほハふ
 るふであらう。 二六 そのとき、いと 二六 一人ひとりハ人ひとは子こがおほいさぬ

權威らんおと榮光えいこうをえつて雲くものうちにあらはれて來くをみるであ
 らう二七 またそれとき人ひとの子こはそれ使つかたれをつうはいて地ち
 にはてあら天てんにはてまで四方ほうあらそれえらばれたものを
 あつむるであらう二八 かんぢらハ無花果むちじくによつて譬たとへをまか
 べその枝えだがそでにやはらあにあつて葉えがめをだせば夏なつは
 ちうくあつたれを志しる二九 それやうふかんぢらもそべてあ
 れられおとをみるからバ時ときがちあく門口かどぐちふさたと志しれ三〇
 わきまことふかんぢらふつげんあきられおとの悉まことくある
 までハあれ民たみハ逝うせぬであらう三一 天地てんちハあくあるともわが
 言ことハあくからぬ三二 それ日ひそれ時ときを志しるをのハたゝわが父ちち
 ばありである天てんふあふ使つかも子こもだれも知しるものハあい三三

六の日はいつくるの志れぬゆゑかちら慎つしんで目をさま
 て祈いのれ三四 人の子ひとは旅立りょだちをせるとしてそれ權けんをくもべどもよ
 まうせおはくくふ爲かきべきふとをさづけまた闘者つどうりふおこた
 らず三五 守まもれといひつけて家をでいへふ人ひとはやうかきのである
 それゆゑかちらもおこたらず守まもれ家いへは主人あるじハ宵よ
 ふあへるあ夜半よなつふあへるう三六 鶏にほとりの鳴なくころふあへるあよあけ 早よ晨あけふ
 あへるあ志れぬ おそらくハ思おもひもよらぬとさふさてかち
 ちらが寝ねむつて居ゐるをみるであらう三七 わがおこたらずふま
 もれどかちらちらふつげるとははせかちをべてはひとふつ
 げるはである

第十四章 さて踰越よこしまいをかち除たねいれぬ酵おん節のいさひは二日まへ三 祭司さいしは

長をさと學者がくしやたちがたばりつてイエスをどらへてころそうと
 して二 まをいませふハ祭まつり日ひふハせぬがよい民たみはうちふ
 亂らんがおこつてハあらぬ ○ 三 イエスがベタニヤは癩病らいびやうやみ
 けシモンは家で食事しょくじを志こておいであされたときある婦をんなが
 蠟石ろうせきはうつはふナルドといふ價あたいはたうい膏あぶらをいれてもつ
 てきてそのうつはをやぶつてイエスは頭かみふあぶらをそゝ
 ぎま志こた 四 ある人ひと々がたがひ小腹せうを立てまをいませふハ
 六のあぶらをつひやませははどういふわけである 五 六れを
 うるあらバテナリ三百さんひゃくあまりを貧乏びんぼう人にんふ不ふどこを六どが
 できるといつてその婦をんなをいひどがめま志こた 六 イエスが
 ふせられませふハそれ係かまふか何な六の婦をんなをかやませあわ

れふ善^よみとを志^したはである 七 貧乏^{びんぼう}人^{にん}はいつもかんとらと
もふあるあらふ、ろまうせふそれを救^まふとができぬ
がわきはいつでもかんとらと、もふ居^ゐらぬ 八 女^{むすめ}婦^{によ}は力^{ちから}
いつばい女^{によ}みとを志^して前^{まへ}もつてわれを葬^{ほうむ}るためふわが身^み
ふあぶらを沃^{そそぐ}だはである 九 われまことみかんとらみつけ
ん天^{あめ}は下^{した}いづくみても女の福^{ふく}音を宣^{のたま}つたへられるところ
みえ女^{おんな}婦^{によ}は志^した女^{によ}もそは記念^{かた}はためみいひつたへら
れるであらう 十 さて十二人^{にん}はうちはひとりはイスカリオ
テはユダハイエスをわたそうとして祭司^{そと}は長^{ちやう}はところへ
まゐりま志^したれば 十一 この人^{ひと}たち女^{によ}れをさいてよろこんで
金^{かね}をあたへやうと約束^{やくそく}志^しましたあらユダハイエスをわた

そうとそは機をりを窺ねらつて居をりまゝした十二 ○ たぬいれぬパンはいと
 ひははじめは日ひをふそち踰越こは羔こひつじをころせばき日ひはお弟で
 子こたちがイエスはところへきてまをいまはみは踰越こは食たべ
 物ものを何處どこへいつて備そかへませう十三 イエスハふたりは弟子でを
 つうはそうと志こころておふせられまは都みやこへ行ゆけそうはるか
 ら水みづをいれた瓶かめを毛けつてゐる人ひとみあふであらううらそま
 み従したがつて行ゆけ 十四 そうしてそのはいるところは主人あるじふむらつ
 ていへ先生せんせいがおふせられるふはわが弟子でと、もふ踰越こを
 たべふ客房きやうふはどこみある十五 そういふからそのものが備そかへ
 たおなきい樓房むらをふんぢらみ示しめてであらううらそこに備そかへ
 をせよ十六 お弟子でがいつて都みやこへはいるとイエスはおふせら

れたどふりあひまゝいたうらむぎこゝはそかへをいたゝま
 いた〇^{十七} 日^ひがくまてあらイエスが十二^で弟子と、もふお
 いでふされて^{十八} 座^ざみついて^{いよくじ}食事をふされるときみイエス
 がおふせられまはみハまことみ我^{われ}かんぢらみ告^{つげ}んかんぢ
 らはうちわきと、もみ食^{いよく}むるをの、一人^{ひとり}ふ我^{われ}を賣^{わた}るのが
 あふ^{十九} 弟子^でたちは心^{こころ}配^{ばい}まておはく、イエスマまをゝまは
 みハ私^{わたくし}でござりまはるまたかうはひとりもまをゝまは
 ハ私^{わたくし}でござりまはる^{二十} 又たへておふせられまはみハ十二
 此^{こゝ}うちのひとりわきと、もみ手^てをさらにつけるもはがそ
 れである^{二二} 人^{ひと}の子^こハおのきみついて志^しるされたと不行^{おく}
 人^{ひと}は子をわたむをのハ禍^{わざはひ}かふとであるそは人^{ひと}ハいつそ

生なまれぬはうが福ふくであつたらう 二三 みか食たべふときみイエスの
 パンをとつて祝いへそれをさいてお弟子でしたちみあたへてお
 ふせられまをみハとつてたべよおれハわが身みである 二三 ま
 た杯せうづきをとつて謝いへおあたへおされまいたればみかそ此こ杯
 あら飲のみました 二四 イエスがおふせられまをみハこれは新約しんやく
 此こわが血ちでおなく此こひと此こため流ながるのである 二五 我われまこ
 とみかんぢらみはげんいまより此こち新あたらしいを神かみ此こ國くにでの
 む日ひまでハ葡萄ぶどうでつくつたものは飲のみまい 二六 歌うたをうたつ
 て橄欖山うんらんざんへまゐりました 二七 イエスがおふせられまをみハ
 今夜こんやかんぢらハみかわれみついて礙つまづくであらう何なにかれハ
 われ牧者つよものをうたんそ此ことき綿羊めんやうちるべいと志こころるされてあ

二八 ける けきどもわさハ魁よみのへつてうらふんぢらたりさきよガリ
 ラヤへ行ゆりう 二九 ペテロガイエスよまをいませよハたとひ
 皆みなが礙つまついても私わたくしハ礙つまつません 三十 イエスがおふせられませよ
 ハ我われまことよ汝なんぢよつげん今日けう今夜こんや鶏にわとりが二次ふたたびあぬうちよ
 かんぢハ三次みたびわれを志しらぬといふだらう 三一 ペテロハまた
 くりあへしてまをいませにハ私わたくしハあたとよもよ死しぬども
 あたを志しらぬとハマをいませんあの子こもみあそう
 まをいませた 三二 それあらゲツセマネといふところへまゐ
 りませたイエスがお弟子でしよおふせられませよハ祈いのちあひだ
 こよ坐まはつて居をれ 三三 つひよペテロヤコブヨハネをつれて
 おいでふされひどく憂うれひ悲かなみをもとふして 三四 おふせられ

まをふハわが心こころはいたくうれひて死しばありであるふんぢ
 らハこゝにまつて目をさまして居をれ三五 是こゝを、んで地
 より伏ふしてお祈いのりかされまをにハもゝ適あを、此こゝ時ときをわを
 より去されたまへ三六 またおふせられまをにハアバ父ちちよあか
 たにおいてハをべて此ことできぬふどハござりませぬふ
 の杯さかづきをわをより取とりりたまへされど我われおもふところをかさ
 うどをるでハござりませぬあかたの思おもひたまふところにま
 うせたまへ三七 イエスの三人さんにんのところへおいでかされてそ
 此寝ねてをふ此を御覽ひらんかされてベテロにおふせられまをに
 ハシモンかんぢハ寝ねたあ一時ひとときも目をさまして居をるふどが
 できぬあ三八 誘惑まどひにいらぬやうに目をさまして祈いのれそ此

れである。うらそれを捕へて去つゝとつれて行ゆけ 四五
 間ま近ぢかく來きてイエスにちうづいてラビラビどいつて口くちをつ
 けまゐた 四六 ひどくイエスに手てをうけてどらへまゐた 四七
 傍そばにたつてゐたひとりひとりが刀つるぎを抜ぬいてさいくくをささははままもべ
 をうつてそれ耳みみをそそまました 四八 イエスが去いへておおふせ
 られままにハ刀つるぎと棒ぼうをもつて盜賊ぬすびとをとるやうに去いて我われを
 どらへにきたあ 四九 わまハ毎まい日にちかんちらど、もに神かみ殿やで教を
 へたはにかんぢらばわれをどらへへんだ去いへへ去いれハ聖せい
 書しよにうあえせふためである 五十 弟子でしたちハみみかイエスを
 かれて道みちまました 五一 ひどりは少わづいもの者ものが身みにた、麻あさの夜具やぐをき
 てイエスに去いたがひまましたが逮と捕とははののどどもが去いれをど

五二
 らへまゝたれば、その麻あざの夜具やぐをきて、裸えだうでにげまゝた
 五三
 ○ ひどくがイエスを祭司さいしをさと祭司さいしをさと長老としよりと學者がくしゃたちがみかそれと
 ありまゝると祭司さいしをさと長老としよりと學者がくしゃたちがみかそれと
 ころへあつまりまゝた、五四ペテロは遠くはかれてイエスに
 志たがひ祭司さいしをさと庭にわにうちまで入はいつて僕しもべどもに坐まは
 つて火ひにあたつて居をりまゝた、五五祭司さいしのをさと集議しゅうぎ員やくハみ
 かいエスをあろそうとして證據しやうこをもとめまゝたがありませ
 五六
 ん、おなくは人ひと々がイエスに偽いつはりは證據しやうこをいひうけまゝたけ
 れどもその證據しやうこが合あひません、五七あるひとくがたつていつ
 はりは證據しやうこを言いひ出だまゝまゝに、五八あのかのハ手てを毛けつて造つくつ
 たこは神かみ殿やをこそして三日みつはうち手てをもつてつくらぬ

他ほろのみやをたてゑといつたのを私わたくしども共ともハさゝまゐた五九とま
 をゝまゝにたがその志こころようこもまた合あひません六十 祭司さいい此こをさ
 が中なかにたつてイエスにどふてまをゝまをにハかんぢこた
 へることハかいうみ此こ人ひと々びとがかんぢにたてゑ證據しやうこハどう
 である六一 イエスハ默然もくねんとしてかにもおこたへかさらぬを
 のゆゑ祭司さいい此こをさハまたどふてまをゝまをにハかんぢハ
 頌ほむべきをのゝ子こキリストこト六三 イエスがおふせられまをに
 ハ左様さやうである人ひと此こ子こが權ちからあるをの右みぎに坐まして天てん此こ雲くも此こ
 のにあらされて來くる此こをかんぢらみるであらう六三 時ときに祭さい
 司し此こをさが衣服きふを裂さいてまをゝまをにハかんぢまたかうに
 志こころようこがいらう六四 あ此こ汚けがしたまどばは御邊ごへん達たちもみか

きうれた御邊達へんたちハいうにおもそれまをうとまをうたれば
 みふイエスを死しにあたふべき色のとさだめまうた六五ある
 色のハイエスに唾つたきをうまたその顔かほをおほひ拳こぶしでたゝいて
 まをうまをにハ預言よげんせよまた僕しもべどもも手ては掌ひらでイエスを
 うちまうた六六ペテロハ下庭したみへにをりまうたが祭司さいしはをさは
 ある婢けぢよがきて六七その火ひにあたつてをるはを見みつくぐと
 みてまをうまをにハおまへもナザレはイエスとゝをにを
 つた六八ペテロハいひけうてまをうまをにハその人ひとハ志ら
 ぬおまへはいふことおわあらぬといつて庭口まへぐちへ出でふと鶏にせどり
 が鳴なまうた六九そは下女げぢよがペテロをみて傍そばにたつてをるを
 のにまたまをうまをにハおは人もあは黨どうのらのひとりである

七十

ペテロハまたいひけゝまゝたがてこゝたつとまた傍そばに
 たつてをるをのガペテロにまをゝまをにハおまへハたゝ
 うにあはともぢぢ黨ともぢぢはひとりであるその證據しやうこにハおまへの方言くになまりが
 ガリラヤ人びとである七一 てるとペテロは誓ちかつてわたゝハ神かみは崇たゝり
 をうけてもおまへたちはいふそは人ひとハ知しぬとまをゝまを
 と七二 そはどきにふいと鶏とりが二次ふたたびあまゝたペテロハイエスはにいと鶏とり
 はふたゝびあくまへに三次みたびわをを志しらずといえんとおふ
 せられたまををおもひだゝまたそれをおもひあへゝて泣なみ
 悲くさしみまゝた

第十五章

平旦よあけにゐるとむぐに祭司さいしはをさ長老とよりのく學者がくしやたちハ

ちべては集議しうぎやく員いんとゝもに相談そうだんしてイエスを縛しばつてひきつ

れてピラトにわたし、まゝした。 二 ピラトがどふてまをしませ
 にハあんぢハユダヤびと此王わうのイエスが来たへておふせ
 られませにハあんぢ此いふどなりである。 三 祭司さいし此をさハ
 いろく此處を毛つて訴うつたへま志たが 四 ピラトハまたイエ
 スにどふてまをしませにハかにも答こたへぬる處ところの人ひと々があん
 ぢについて證據しやうこをたてたことハどれだけであるか。 五 ピラ
 トが不思議ふしぎにおもふやどイエスハかにもおこたへかさ
 ません。 六 さて此の祭まつりのときにハユダヤびとのねがひにま
 うせて一人ひとり此囚とらにん人をゆるせ例れいがござりませ。 七 此にバラ
 バといふ名なのがあつておのれどもに謀叛むほん志たどもがら
 どもにつかかれてをりまゝたが此名なのどもハ謀叛むほん此と

さ人ひとを殺ころたものでござりませ八。ひとぐの聲こゑをあげてよ
 ば、つて恒例いつものとかりに志こころてくださいいとねがひました九。ピ
 ラトがまたへてまをいませにハユダヤびとと王きようをあんぢ
 らにわが赦ゆるむことをねがふ十。ピラトハ祭司さいいとをさたち
 が嫉ねたみによつてイエスをわたしたとを志こころつてをつたゐら
 このやうにまをいたれでござりませ十一。さいくをさは民たみ
 にバラバをゆるしてもらうとを願ねがへとせよ、めまた十二
 ピラトはまたまたへてまをいませにハさらバユダヤびと
 と王わうとあんぢらがとあふるゑのかににハ何をせよとを望のぞむめ
十三。ひとぐまたさけんでおれを十字架じふじにつけよとまをい
 ませ十四。ピラトがまをいませにハあれハ何なんれ悪事あくじを志こころたあ

人々ひとびとまをくさげんでおれを十字架じふじにつけよとまをい
て十五ピラトハ民たみの氣きにいられやうとおもつてバラバをゆ
ゝてイエスをむちうつて十字架じふじにつけるためにわた
りて十六兵卒へいそつどもハイエスを役所やくしよにつれていつて全營くみちゆうを
よびあつめ十七紫袍むらさきをきせ棘いばらで冠かんむりをあんでうむらせま
た十八そうしてまをいまをにハユダヤひと王わう安やたまへ十九
葦あしをもつてそれ頭くしらをたゝきまた唾つなきをひざまつ跪ひざまついて拜をがみま二十
さん十九嘲弄てうろう志して志しまつてあら紫むらさきの衣まものをはいでもとの衣まもの
を二十させて十字架じふじにつけるとて引ひいていさました二十一がアレキ
サンデル二十とル二十一フの父ちちのクレネ二十二のシモン二十三といふ毛けの二十四が田間いんか
うらきてそのど二十五ころを通とほりあゝま二十六したあ二十七ら強いひてそれ二十八に

イエスは十字架をおはせまゝした。イエスをゴルゴダ譯バ
 石はら髑髏といふところへつれてまゝした。没薬を酒
 にまぜて飲せやうとまゝした。それがれをおうけあさりませ
 んでありまゝした。イエスを十字架につけた後で誰が何を
 どらうといつて鬮をとつてそれが衣服をわけまゝした。朝は
 第九時にイエスを十字架につけ、それが罪標をユダヤ人の
 王どあきまゝした。二人は盜賊がイエスと、もに一人はそ
 れ右一人はそれ左に十字架につけられまゝした。みれハ聖
 書にそれは罪人と、もに算られたりどある。これにあひま
 した。往來は色のガイエスを話つて首をふつてまをしま
 せにハあ、神殿をみぼちてこれを三日にたてゐ色のよ

自みづらを救まひて十字架じふをおりよ三一 祭司さいをさ學者くわとも、
おあじく嘲弄てうろうしてたがひにまをさまをさにひ人をむをむくふて
自みづをむくふふとは出來でぬ三三 イスラエルわう王わうキリストいハ今いま
十字架じふよりくたふべしさららわれらみてみれをしんじやう
またとも偕ともに十字架じふにつけられたらのども、イエスをむ、志
りました三三 第十二じふ時じあら三時さんまであまぬく地ちはうへがく
らくかりました三四 第三だい時さんにイエスハお不で意によんで五
リエリラマサバクタヒとおふせられましたみれをとけば
わがう神うわがう神うあんぞわををををてたまふやといふふとでご
ざりまを三五 そぼにたつてをるは、うちあるひとがこれを
き、てあればエリヤをよぶはであるとまをしました三六 ひ

どり走つて行て海緘をどり醋をふくませてそれを葦につ
 けてイエスに比ませてまをしませに待エリヤがきてむく
 ふあどうろみよう○イエスハおほごゑを出て息
 がお絶あされまいたそのとき神殿比幔が上あら下まで
 さけて二にかりまいたイエスにむうつてたつてをつた
 百人比あいらがあのかうによばつて息のお絶あされた
 比をみてまをしませにハマことにお比人は神比子である
 ○ またはるあにみてをつた婦がござりまいたがそ比中
 にをつたえのハマグダラ比マリアとちひさいヤコブとヨ
 セフの母のマリアとサロメでござりまを
 ハイエス比ガリラヤにおいてあされたとるに志たがひつ

あへたえのでござりまをまたこは不^ならにもイエスど、も
 にエルサレムへ上^あつたおなくは婦^{むすめ}たちがをりまゝた○
 四二
 六の日^ひはそかへ日^ひで安息^{あんそく}日のまへの日^ひゆゑに
 四三
 日^ひくれが
 た貴^{たふと}き集^{しゅう}議^ぎ員^{やく}はアリマテヤはヨセフといふえのがさまゝ
 た六の人は神^{かみ}の國^{くに}をはぞんでをる人^{ひと}でござりまを六のひ
 どハ憚^{えい}ず^{うら}にピラトはところへいつてイエスの死^し骸^{がい}を請^{こひ}ま
 四四
 したピラトハイエスのもそやお死^しか^にされた六を不^ふ思^し
 議^ぎにおもふて百人^{ひやくにん}の首^{くび}をよんでそのお死^しか^にされてあら時^{とき}
 がたつたうどうあとどふて
 四五
 百人^{ひやくにん}のあいらあ^{きい}ら聞^きてその
 時^{とき}はたつた六を志^しりそう志^して死^し骸^{がい}をヨセフにあたへま
 した
 四六
 ヨセフハ布^{ぬの}をうひもどめてそうしてイエスをとり

おろしてその布につゝんで岩にほつた墓において石を墓
の門にころばしておきました四七 マグダラのマリヤとヨセ
の母のマリアはその死骸をおいたところをみました

第十六章

安息日が過ぎてマグダラのマリアとヤコブの母

のマリアとサロメは香膏を買とのへイエスにぬらうと
おもつてきました二 七日の始の日ごく早く日の出ごろ墓
にきて三 たがひにまをしませにハ誰の石を墓の門あらは
ろばしてどつてくれるものがあるであらうその石はた
いそう大いあらそういつたのでござりませ四 ういつて
目をあぐると石がもえやころばしてあるのをみました五
はゝに入つてみると白衣をきた少色のが右のはうにをば

つてをるのをみておどろき不思議におもひました六 その
 少わづ色のがまをしませにハおどろきあやむあんなちは
 十字架じふじにつけられたナザレのイエスをたづねぬがイエス
 ハもえやよみのへ甦よみのへつて此こゝにはおいであさらぬイエスをおきま
 をしたところをみよ七 また行ゆてお弟子でしたちとペテロふつ
 げよイエスハあんなにさきだつてガリラヤへおいてお
 されたあんなぢらハそのおふせられたと知りガリラヤでお
 あひまうせであらう八 うれらハこゝを出で、趨そまうつ戦慄ふるひ
 うつおどろきまた一事ひとごとも人ひとにあたりませんでありました
 それは懼おそれたあらでござりませ九 ○ イエスハ七日あなのちの始はじめの日ひ
 のよあけごろに甦よみのへつてまづマグダラのマリアにおあらは

れあされまゝた先にイエスのよのより七つは悪鬼を
 おゝひだゝあされまゝたイエスと、もにあつたをのが
 泣なみ悲かなんでをつたどきにあをんかの婦をんかがきてあれらばあどをつげ
 まゝた十二この人ひとたちハイエスがおよみがへりされてあをんかの
 婦をんかにおみえあされたあどをき、まゝたが信しんじませんであ
 りまゝた十二あは、ちそのうち二人ふたりはあのが田間いんかへまゐり
 まゝたがみちをあるくときイエスが變かはつた容ようでおあらはれ
 あさ十三まゝた十三あは二人ふたりはあのが行いつてあの弟子でたちに
 つげたけれどもまたあれも信しんじませんでありまゝた○十四
 またその、ち十一の弟子での食しょく事じを去してをるときにあらは
 れてその信しん仰うあきあど、その心こゝろの顔かほあどをおいまゝめあ

されまゝいた十五 イエスがあまねおふせられまゝにせハ普く世界をあめ
 ぐりてひとすべての人に福音をのべつたへ宣傳よ十六 信しんじてあバプテスマを
 うくまふはものはま救れしん信しんぜあざるあものあハ罪つとにあだめあられるあ 信しん
 ずるあものあにあ左さのあごあときあ休やす徴しるしがあまたあがあふあでああらあうあわがあ名あ
 によあつてあ惡あく鬼き液えきおあひあだあ一あ外ぐわい國こくのあこあとあばあをあいあひあ 十八 又あたあ蛇へびを
 とあらあ一あ毒どくをあ飲のむどもあ害がいかあくあまたあ手てをあ病やまいのあものあにつあけるあから
 ばあ愈いえるあでああらあうあ 十九 又あくあてあ主しゅハあひあとあ 一あにあおあたありあああさ
 れたあのあちあ天てんにあああげあられあ神かみのあ右みぎにあおあ坐ましあああされあましたあ 二十 又
 弟子でしたあちはあああまあ絲いとくあ福ふく音いんをあ宣のたままあしたあ主しゅもあまたありあれあらあにあ力ちから
 をあおあああはあせあああされあそのあ従したがふあとあころあのあ休やす徴しるしをあもあつてあそのあ言ことば
 のあ證あかしとあああされあまあしたあアあーあメあンあ

『新約聖書 馬可傳』の誤植。 P.35 P.36 P.37 P.38の第四章は第五章の誤り。

解 説

『馬可傳 俗話』の「でいぢります」という特徴的文末表現を井深は何に倣ったのであろうか。柴田鳩翁の『鳩翁道話』に範をとったという説^①がある。他にも江戸時代の人情本や明治に入ってから円朝落語の速記本も世に広く出回っていたであろう。しかし、井深樞之助の経歴から、彼の師であるS・R・ブラウンの『日本語会話・英和俗語会話集』、*Colloquial Japanese, or Conversational Sentences and Dialogues in English and Japanese with An English-Japanese Index to serve as A Vocabulary; and An Introduction on Grammatical Structure of the Language* (1863)^②、その会話体日本語、敬体「ゴザリマス」、‘go za-ri-mas’の可能性も考えられるのではないか。

『新約聖書馬可傳』には奥付がなく、訳者名も記されていない。が井深談「俗語馬可傳は、アメルマン (J. L. Aneman) 博士の依頼で、私が既に出来上っていた邦譯のものを口語体にして見たに過ぎない」と語っていることから、この訳は井深樞之助によるものと断定してよいであろう。また「既に出来上っていた邦譯」とは、井深も関わっていた翻訳委員社中訳『新約全書』(一八八〇年)を指すといわれている。もしもその説が正しければ、井深はこの大事業を単独で、しかもわずか一年という短期間で成し遂げたことになる。井深はこの年に東京一致神学校助教に招聘された。その前年には結婚、麴町教会牧師就任と多忙をきわめ

ていた筈である。アメルマンからの依頼がいつのことか不明であるが、委員社中訳『馬可傳』分冊出版が一八七七年四月であるから、編者は、井深の改訳はこちらによったのではないかと考えた。しかし七七年版を詳しく読んでみると、例えば、前出一章一節は「こ逆神の子耶穌キリストのふくいんのそじめなり」とある。訳文自体は『新約全書』のそれと全く同じであるが、かな書き、その他表記の仕方に明らかに違いがあり、通説どおり井深訳の底本は一八八〇年『新約全書』であることが判明した。

このように井深訳の底本となった『新約全書』は翻訳委員社中の日本人補佐者が全面的に依存したブリッヂマン―カルバートソン訳『舊新約全書』(上海美華書館、一八六三―六四年)であった。その漢訳文を基にした委員社中訳の漢文直訳調文語文を井深がいかにして「俗話」訳に、また自然な日本語に近づけたのか、その翻訳過程を以下の視点から跡付けてみよう。^③

- 1 「俗話」という井深の文体について、特にその文末表現。
- 2 語彙について。漢語を和語、あるいは口語で言い換える。
- 3 中国語の影響を残す漢文訓読体による委員社中訳を日本語の語順に変える。
- 4 日本語特有の尊敬語、謙讓語、丁寧語、対人関係を示す人称代名詞、

格助詞を加える。名詞の単数、複数の扱い。主語の省略、敷衍的訳、原文にない語を補うなどの工夫。

5 文字と表記。変体がな、送りがな、促音、拗音。訳文は漢字に傍訓を施した振り仮名の方を本文とする。固有名詞、地名には二重の、人名に一重の傍線を付す。段落、分節化しない。引用文、会話文にかぎ括弧を施さない。その他の記号等。

6 翻訳委員社中訳と井深訳に違いが見られる箇所については英訳聖書(King James Version)を、さらにギリシャ語原典により正誤を判断する。

7 訳語について。漢訳において中国で作られた訳語が『新約全書』、井深訳、大正改訳、そして聖書協会口語訳へと踏襲されたもの、あるいは変えられた語など、聖書の日本語訳における訳語の変遷を辿る。

註

(1) 藤原藤男『聖書の和訳と文体論』一四九ページ。

(2) 『植村正久と其の時代』第四卷、三五五ページ。

アメルマン博士、James Lansing Anemanは一八七六年米國オランダ改革派教会宣教師として来日、横浜のブラウン塾教師となる。一方井深梶之助は一八五四年会津藩士の家に生れ、戊辰戦争では年少のため白虎隊に加わることが出来なかった。会津落城後、上京して英学修業、後に横浜ブラウン塾に学び、七三年、S・R・ブラウンより受洗。アメルマンとの出会いはこの塾に於いてであったが、七七年、東京一致神学校創立により、同校教授となるアメルマンと共に築地に移り、井深は神学生として、またアメルマンの通訳として講義を助ける。後に井深はアメルマンの著書翻訳も行なっている。

井深は八八年、明治学院教授、九一年にJ・C・ヘボンの後を継ぎ明治学院第二代総理に就任。九九年、文部省訓令第十二号に対して、その撤回を求め、キリスト教教育を守る運動の中心的働きをした。

(3) 本論考を進める上で、飯田晴己著『明治を生きる群像―近代日本語の成立―』により、多くの示唆が与えられた。特に近代日本語の文章、文体、語彙、文字と表記法、文法など、教えを受けた。記して謝意を表します。

凡例

引用聖書の略号は次の通りである。

1. ① 『引照 新約全書馬可傳福音書』 耶蘇降生一千八百八十年、明治十三年 米國聖書會社 日本横濱印行
2. ② (KJV) *THE HOLY BIBLE Containing THE OLD AND NEW TESTAMENT*, Authorised King James Version, Collins World
3. ③ (天) 『インターリニア ギリシヤ語新約聖書』 白畑司編 『マルコによる福音書』 上、中、下、ポーロス会 二〇二二年
4. ④ (漢) 『新約全書』 横濱、大英國聖書會社、一八八一年 (Bridgman-Culbertson) 訳 『耶蘇基督救世新約聖書』 上海、美華書館、一八五九年の復刻版)
5. ⑤ (大) 大正改訳 『改譯 新約聖書』 日本聖書協會、昭和二八年
6. ⑥ (口) 『新約聖書』 一九五四年改訳 日本聖書協會
7. ⑦ (㊄) 『新約聖書 英和對照』 日本聖書協會 英文RVは *The Oxford and Cambridge University Presses, the Revised Version text*
8. ⑧ (RSV) *THE HOLY BIBLE Revised Standard Version, New Testament, 1946*, ZONDERVAN PUBLISHING HOUSE, GRAND RAPIDS
9. ⑨ (岩) 『新約聖書福音書』 新約聖書翻譯委員會、佐藤研・小林稔訳、岩波書店、一九九六年

井深訳の『馬可傳 俗話』一章三節は、イザヤ書四十章三節からの引用で、引用符なしの、野に呼ぶ人の聲は主の道を備へその道筋を直ぐせよ、である。井深が底本とした『新約全書』、この節にはやはり単鉤「」がなく、野に呼ぶ人の聲は主の道を備へ其徑すじを直ぐせよ、である。井深が漢字をかな書きに変えたほか、訳文自体は全く同じ、以下全篇、旧約聖書からの引用文は委員社中訳と同じ文語文であり、それらを除くすべてが井深のいう俗話体の文体である。

文体の特徴は文末に現われるといわれる。それでは井深俗話文の文末表現はどのようなであろうか。前述の一章一節の「ござります」(以下変体かなを普通のかなに直して表記)は、七節の、私がかんでその履のひもとくにも足ぬものでござります、にも見られる。これは「ござる」に「ます」を添えた敬語である。以下典型的な末辞をもつ例をあげる。(漢字のふりがなは特別の読み方をするものを除き省略する。)

1 文末辞

- 1:6 ヨハネハ：蝗蟲と野密をたべて居りまふた。(全 食へり)
 3:20 食事をする暇もござりませんでした(全 喰する暇もなかりき)
 1:24 私共のあなたと何の關係が**あ**りますか(全 有んや)
 1:24 これらの悪きことはみな内より出、ひとをけがすものである(全 也)
 5:23 2:22 7:23 かはぶくろの破れるであらう(全 壊るべし)
 1:24 そうすれば女**ハ**生まれませう(全 生べし)

4:4 空の鳥がきてこれを食た(全 食へり)
 4:7 實をむすばなんだ(全 結びざりき)

2:5 子よ汝の罪ゆるされたぞとおふせられました

(全 爾の罪赦されたり)

6:25 10:49 安心まてたちなさい(全 安んぜよ起)

6:25 10:49 パブテスマのヨハネの首を……私にくださいませとまうしました(全 我に賜へ……)

5:7 どうぞわたくしをくるしめてくださるな(全 苦むること勿れ)

1:44 1:43 人に何もはなしてはならぬぞ(全 人に告る勿れ)

1:44 1:43 モーセがいひつけたものを獻る(全 獻て……なせ)

6:27 1:44 1:43 ヨハネの首をもつて來(全 携來れ)

11:2 12:17 12:15 2:11 6:27 1:44 1:43 汝の家に歸れ(全 歸れ)

11:2 12:17 12:15 2:11 6:27 1:44 1:43 デナリをわれにもつてきて見せろ(全 觀よ)

11:2 12:17 12:15 2:11 6:27 1:44 1:43 神のものハ神にかへせ(全 歸すべし)

11:2 12:17 12:15 2:11 6:27 1:44 1:43 それを解て牽てこい(全 牽來れ)

文末辞でないが勧誘、決意の表現(口語)

12:14 これは嗣子であるサアこれを殺そつ

(全 此ハ嗣司な率これ殺さん)

(全) Come, let us kill him,

(全) Come, let us kill him,

12:14 さて貢をカイザルに納るハ宜まうござりますか

④ 貢をカイザルに納るゝ宣よや否いな

④ but teachest the way of God in truth: Is it lawful to give tribute to Caesar, or not?

④ It is John, whom I beheaded:

11:21 お誼なされたいちじくは枯てしまいました

④ 誼し所の無花果樹の枯たり

④ The fig tree which thou cursedst is withered away.

この節は『全書』の「誼し所」という関係代名詞的訳が改善されている。

欧文直訳体の影響が、しかも抽象名詞を主語にする表現。

日本語として馴染まなかつたのではないか。

5:34 なんぢの信仰がなんぢをすくつた ④ 爾の信なんぢを救り

④ thy faith hath made thee whole;

2 語彙なじ

文体上の違いは文末辞だけでなく単語、語彙の表現にも見られる。井深訳は『新約全書』の漢語を和語に言い替えている。

漢訳聖書の影響を受けた邦訳の訳語の変遷を、井深訳、『新約全書』、漢訳、大正訳、口語訳の順に追ってみよう。

関係代名詞的訳「ところの」

6:16 これいわがその首を斬たところのヨハネである

④ 是わが首斬し所のヨハ子也

委員社中『新約全書』が漢語としたものを井深訳は和語に言い換えたもの

章節	(一八八一年)	(一八八〇年)	(一八六三年)	(一九一七年)	(一九五四年)
6:3	井深訳(和語)	新約全書(漢語)	漢訳	大正改訳(文語)	聖書協会(口語)
5:43	聖靈	聖靈	聖靈	聖靈	聖靈
5:34	お坐りなされた	坐し給ひに	坐	坐し給へる	すわつておられる
13:3	安然に	安然に	安然	安らかに	安心して
3:29	食物	食物	食	食物	食物
	姉妹	姉妹	姉妹	姉妹	姉妹

13:24	6:11	6:5	6:3	5:33	4:17	1:40	1:31	1:16	
患難	證據	病人	大匠	白状いたしました	暫時	御意にかなへば	給事	漁者	井深訳(漢語)
患難	證據	患者	木匠	實情を告	暫時	聖意に適ときハ	供事	漁者	全書(和語)
患難	證	病者	木工	實告	暫	肯	供事	漁者	漢訳
患難	證據	病める者	木匠	ありしまを告ぐ	暫し	御意ならば	事ふ	漁人	大正改訳
患難	しるし	病人	大工	ありのまを申し上げた	しばらく	みこころでしたら	もてなした	漁師	聖書協会(口語)

委員社中『新約全書』が漢訳を和語に訳した語を井深訳は漢語に戻したもの

6:50	4:27	10:6	16:1	10:6	9:34	8:12	6:49	
安心せよ	夜日	男と女	香膏	開闢るはじめ	黙てをりました	ふかくなげいて	化物	
心安かれ	日夜	男女	香料	開闢のはじめ	黙然たり	深く歎息して	變化	
安爾心	日夜	爲男爲女	香料	創造之始	黙然	太息	怪物	
心安かれ	日夜	男と女	香料	開闢の初	黙然たり	深く歎じて	變化	
しつかりするのだ	夜昼	男と女	香料	天地創造の初め	黙つて	深く歎息して	幽霊	
<p>〔「なん」「によ」は漢音でなく呉音、明治二十年代に呉音と漢音の交替が行われた〕 (明治前期、二字の漢語字順逆になった語)</p>								

12:12	9:11	9:3	8:3	8:2	7:28	7:5	6:55	6:19	4:30	3:11	2:7	
ひと／＼をおそれ	どろ／＼ふこどで こざりますか	出来まい	途でなやむ	あはれむ	おふせのとほり	どういふ譯で	かけまはつて	そふいふわけにへ行ず	あなた	なぜこのやうな	井深訳	
衆人を懼	何ぞや	爲能ハざる	途間にて憊ん 爲能ハざる	憫む	然	何ゆゑ	馳ゆき	しかと能ざりき	爾	何故	全書(和語)	
懼衆	何歎	無能	途間必困憊	憫	然	何	馳	弗得	爾	何如	漢訳	
群衆を恐れ	何故	爲し得ぬ	途にて疲れ果てん	憫む	然り	なにゆゑ	馳せまはり	能はず	なんぢ	なんぞ	大正改訳	
群衆を恐れた	なぜか	できないくらい	途中で弱り切つてしまふであらう	かわいそうである	お言葉どおりです	なぜ	駆けめぐり	できないでいた	あなた	なぜ	聖書協会(口語)	

『新約全書』の訳語(漢語)を和語、口語に換え、ひらがなで表記したもの

16:5	15:45	14:64	14:49	14:5
不思議におもひ	死散	御邊達	毎日	貧乏人
駭異	屍	爾曹	日々	貧者
驚く	屍體	なんぢら	日々	貧しき者
驚いた	死体	あなたがた	毎日	貧しい人たち

5:39	5:21	3:32	3:14	
寝たのである お母さん 向岸				井深訳
寝たる 彼岸 母				全書(和語)
寝 彼岸 母				漢訳
寝ねたる かなた 母				大正改訳
眠っている 向こう岸 母上				聖書協会(口語)

『全書』委員社中ですでに和語になっている語を、井深訳はさらに口語に言い換えたもの

13:33	15:43	13:18	10:5	
憚す 憚で 冬に遁る 憚り				井深訳
つれなき 冬にくる はからず つしこて				全書(和語)
硬 冬時逃遁 毅然 憚				漢訳
つれなき 冬おこらぬやうに 憚らず 心して				大正改訳
かたくな 冬おこらぬやうに 大胆にも 気をつけて				聖書協会(口語)

逆に『新約全書』はかながきを井深訳では漢字に表記したもの

12:20	12:13	14:70	14:36	13:3	14:1	12:34
へろデのともから こゝに へろデのともから こゝに						
愛に へろデの黨 愛に						
ナシ 希律黨 ナシ						
へろデ黨 肯はず へろデ黨 へろデ黨						
へろデ黨の者 打ち消した へろデ黨の者 へろデ黨						
(KJV) Now						

3:12	1:45	1:28	1:24	1:11	
お禁めなされました	廣まりました 邑	関係	わが喜ぶところの	井深訳	
戒めたり	城	播りぬ 與り	わが悦ぶ所の	全書(和語)	
戒	城	洋溢	我所喜悅	漢訳	
戒め給ふ	町	弘りたり 関係	我が愛しく	大正改訳	
戒められた	町	ひろまった 係わり	わたしの心にかなう	聖書協会(口語)	

井深訳と『新約全書』のかたと漢字の違い

16:17	15:5	14:58	14:14	13:31	13:16	12:25	12:4	9:39	9:3	8:4	6:50
外國のことは	不思議	神殿をこはして	先生	天地はなくなる	衣服	娶もせず	頭	悪くいひなすことのできるもの	出来まい	何處で	安心せよ
異邦の方言	奇	聖殿を毀ち	師	天地の廢ん	衣服	娶す	首	誹得る者	爲能いざる	何處より	心安かれ
異邦方言	奇	毀之	師	天地必廢	衣	娶	首	輕誹	無能	處何	安爾心
新しい言葉	怪しむばかり	宮を毀ち	師	天地は過ぎゆかん	上衣	娶らず	首	譏り得る者	爲し得ぬ	何處より	心安かれ
新しい言葉	不思議	神殿を打ちこわし	先生	天地は滅びるであろう	上着	とついたりすることはない	頭	そしる	できないくらい	どこから	しつかりするのだ
Ⓜ γλωσσας λαλιουον κεινης;											

6:33 6:8 6:2 5:5 5:26 5:26 5:38 4:25 5:19 5:14 5:14 5:10 4:39 4:37 4:31 4:22 3:28 3:15

徒で	食物 人々	おのれの身に瘡をつけ	何の甲斐もなく	身代	騒立、	有ぬもの	憐れみ	村々	通行て	頻に	穉になり	風はやんでたいそう	大風	萬のたね	顯かにならぬ	汝曹	愈し
歩行にて	糧食 衆人	己が身に傷つけ	何の益もなく	所有	忙亂いたく	無有者	恤こ	郷村	逃ゆきて	切に	風やみて大に和たり	颯風	百様の種	明瞭にならざる	爾曹	醫し	
徒行	糧	衆	自傷	不見益	所有	號眺	無有者	恤	村	奔	遂切	風即止、 乃大平息	颯風	百種	不致現	爾	醫
徒歩	糧	己が身を：傷つけ 多くのもの	何の效なく	有てる物	騒	有たぬ人	憫み	町にも里にも	逃げ往きて	切に	風やみて、大なる風と なりぬ	颯風	萬の種	あらはるる爲ならで	汝ら	ナシ	
駆けつけ	パン	人々	自分のからだを傷つけて	なんのかいもない	持ち物みな	騒いでいる	あわれんで	町や村	逃げ出して	しきりに	風はやんで、大なきに なつた	突風	どんな種よりも	現れないものはなく	ナシ	ナシ	

Ⓢ and to have authority to cast out devils: (大正訳が参考にした)。
Ⓢ and have authority to cast out demons: (口語訳が参考にした)。

パンの不思議
 言傳
 盃
 様々
 自己
 意味
 遠方
 筐
 この類
 報
 消ざる火
 生命
 律法
 家
 捫れるため
 なんぢが知とほり
 である
 偽の證
 貨財
 針の孔を通る

パンの寄跡
 遺傳
 杯
 多端
 己
 意
 遠處
 籃
 此族
 賞
 滅ざる火
 永生
 命
 室
 撫れんがため
 爾が識とこりなり
 妄の証
 財
 針の孔を穿る

餅之奇跡
 遺傳
 杯
 多端
 爾
 之
 遠來
 籃
 此族
 賞
 不滅之火
 生
 命
 室
 撫
 爾識
 妄證
 財
 穿針孔

パンの事
 言傳
 酒杯
 多くの
 おのれ
 ナシ
 遠く
 籃
 この類
 報
 消えぬ火
 生命
 誠命
 家
 觸り給はん
 汝が知るところなり
 偽證を立つる
 財寶
 針の孔を通る

パンのこと
 言伝え
 杯
 たくさん
 自分たち
 ナシ
 遠く
 かこ
 このたぐい
 報い
 消えない火
 命
 定め
 家
 さわつていただくため
 あなたの知つてい
 とおりである
 偽証を立てるな
 宝
 針の穴を通る

(GK) ἐπι τοῖς ἄρτοις (KJV) the miracle of the loaves
 (RV) concerning the loaves (RSV) about the loaves

(GK) περὶ τῆς παραβολῆς (KJV) concerning the parable
 (RV) asked of him the parable (RSV) about the parable

(GK) σπορίῳ κῶφινος (RSV) 「筐」と訳してゐる。

教 <small>を</small> し	供物 <small>そまへもの</small>	神 <small>かみ</small> の力 <small>ちから</small>	家 <small>いへ</small> のすみ <small>おやいし</small> の首石 <small>くびいし</small>	騷動 <small>そうどう</small>	身代 <small>しんだい</small>	打 <small>う</small> たり殺 <small>ころ</small> したり	農夫 <small>ひやくしやう</small> にかして	ひとを恨 <small>うら</small> む	願 <small>ねが</small> ふもの <small>(うらむ)</small>	都 <small>みやこ</small>	わが家 <small>いへ</small>	鳩 <small>はと</small> をう <small>う</small> るもの	實 <small>み</small>	無花果 <small>いちじく</small>	神殿 <small>みや</small>	向 <small>むか</small> ひの村 <small>むら</small>	行 <small>ゆけ</small>	限りなき生命 <small>いのち</small>
教誨 <small>を</small> し	禮物 <small>そまへもの</small>	神 <small>かみ</small> の能 <small>ちから</small>	屋 <small>いへ</small> の隅 <small>すみ</small> の首石 <small>くびいし</small>	變亂 <small>みだれ</small>	産業 <small>さんげう</small>	撲 <small>う</small> あひ <small>ひ</small> 殺 <small>ころ</small> しぬ	農夫 <small>ひやくしやう</small> に租 <small>か</small> し	人を憾 <small>うらむ</small>	求 <small>ねが</small> ふ所 <small>ところ</small> のもの	城邑 <small>みやこ</small>	我室 <small>わがいへ</small>	鳩 <small>はと</small> を鬻 <small>う</small> るもの	果 <small>み</small>	無花果 <small>いちじく</small>	聖殿 <small>みや</small>	對面 <small>むかひ</small> の村 <small>むら</small>	往 <small>ゆけ</small>	窮 <small>かきり</small> なき生 <small>いのち</small>
教誨 <small>を</small> し	祭祀	神 <small>かみ</small> 之能 <small>ちから</small>	屋隅 <small>いへ</small> 之首石 <small>くびいし</small>	變亂	業	撲之 <small>う</small> 、或殺之 <small>あるひ</small>	租與農夫	人有憾	何求	城	我室	鬻鳩者	果	無花果	殿	對面之村	往	永生
教 <small>を</small> し	犠牲	神 <small>かみ</small> の能力 <small>ちから</small>	隅 <small>すみ</small> の首石 <small>くびいし</small>	ナシ	嗣業 <small>しげふ</small>	或は打 <small>あるひ</small> 、或は殺 <small>あるひ</small> したり	農夫 <small>ひやくしやう</small> ども	人を怨 <small>うら</small> む	願 <small>ねが</small> ふ事 <small>こと</small>	都 <small>みやこ</small>	わが家 <small>いへ</small>	鳩 <small>はと</small> を賣 <small>う</small> るもの	果 <small>み</small>	無花果 <small>いちじく</small>	宮 <small>みや</small>	むかひの村 <small>むら</small>	ゆけ	永遠 <small>とこしへ</small> の生命 <small>いのち</small>
教 <small>を</small> しておられ	犠牲	神 <small>かみ</small> の力 <small>ちから</small>	隅 <small>すみ</small> のかしら石 <small>いし</small>	ナシ	財産 <small>ざいざん</small>	打 <small>う</small> つたり、殺 <small>ころ</small> したり	農夫 <small>ひやくしやう</small> たち	恨 <small>うら</small> み事 <small>こと</small>	祈 <small>いの</small> り求 <small>もと</small> めること	都 <small>みやこ</small>	わたしの家 <small>いへ</small>	はとを賣 <small>う</small> る者	実 <small>み</small>	いちじく	宮 <small>みや</small>	むこうの村 <small>むら</small>	行 <small>い</small> け	永遠 <small>えいえん</small> の生命 <small>せいめい</small>

(RV) there shall be famines and troubles (RSV) there shall be famines; (RV) there shall

海緞 うみわた	冠 かんむり	役所 やくしよ	望か のぞみ	祭 まつり	縛つて しば	庭口 にわぐち	劍 つるぎ	歸つて	誘惑 まじひ	もし適はゞ	神のものをつくりはじめたまたまた世の始より	宰 つかさ	終 をへり	休徴 あらし	この家	身代ごとくく	乏い とほし	嫠婦 やもめ
海綿 うみわた	冕 かんむり	公廳 やくしよ	欲むや のぞ	節筵 まつり	繫り あは	庭門 にわぐち	刃 つるぎ	返りて	誘惑 まじひ	若しかならゞ	神の物を創造たまひし開闢より	侯 つかさ	末期 をへり	兆 しるし	この殿宇	全業を盡く	不足 とほまき	嫠婦 やもめ
海緞 うみわた	冠 かんむり	公廡 やくしよ	欲 のぞ	節筵 まつり	繫 あは	門檐 にわぐち	刃 つるぎ	返	誘惑 まじひ	或可爲	自神創造所造者以來	侯 つかさ	末期 をへり	兆 しるし	此屋宇	盡投所有、即其全業	貧乏	嫠 やもめ
海綿 うみわた	冠冕 かんむり	官邸 くわんてい	如何にすべきか	祭 まつり	縛り しば	庭口 にわぐち	劍 つるぎ	また來りて	誘惑 まじひ	若しも得べくば	神の萬物を造り給ひし開闢より	司たち つかさ	終 をへり	兆 しるし	これらの建造物	己が生命の料をことごとく	乏しき とほ	寡婦 やもめ
海綿 かいめん	冠 かんむり	總督官邸 そうとくくわんてい	どうしたらよいか	祭 まつり	縛つて しば	庭口 にわぐち	劍 けん	またきて	誘惑 ゆうわく	もしできることなら	神が万物を造られた創造の初めから	長官 ちやうかん	終り おわり	前兆 ぜんちやう	立派な建物	あらゆる持ち物、その生活費全部	乏しい とほ	やもめ

6:1	4:26	3:29	2:26	1:44	1:23	1:21	1:13	1:1	1:1	
お弟子	神の國	聖靈	パン	祭司	會堂	安息日	サタン	福音	イエス・キリスト	井深訳
弟子	神の國	聖靈	パン	祭司	會堂	安息日	サタン	福音	イエス・キリスト	全書(和語)
門徒	神國	聖靈	餅	祭司	會堂	安息日	撒但	福音	耶穌基督	漢訳
弟子	神の國	聖靈	パン	祭司	會堂	安息日	サタン	福音	イエス・キリスト	大正改訳
弟子たち	神の國	聖靈	パン	祭司	會堂	安息日	サタン	福音	イエス・キリスト	聖書協会(口語)
〔「門徒」は宗門を同じくする寺の信者を意味するので「弟子」とした。〕										

聖書、キリスト教用語

16:10	16:8	16:2	15:46	15:46	15:43	15:36
泣き悲しんで	一事も	七日の始の日	岩	布	貴き集議役	待
泣き悲しんで	一言をも	七日の首の日	磐	泉布	尊き議員	俟
哀哭	(ナシ)不告	七日之首日	磐	泉布	尊貴議員	姑
泣き悲しみ	一言をも	一週之首の日	岩	亞麻布	貴き議員	待
泣き悲しんで	何も	週の始の日	岩	亞麻布	地位の高い議員	待
(KJV) neither said they any thing						

10:21		14:24	1:4	16:20	15:42	14:1	14:1	12:42	12:33	12:24	7:1	2:5	11:21	8:34	6:14	6:12	6:4	5:8
そうまでから	井深訳	新約のわが血	バプテスマ	アーメン	そなへ日	除酵節	踰越	レプタ	燔祭	聖書	學者	信仰	ラビ	十字架	不思議なわざ	悔改むべきこと	預言者	悪鬼
而して	全書(和語)	新約の我血	バプテスマ	アーメン	備節日	除酵節	踰越	レプタ	燔祭	聖書	學者	信仰	ラビ	十字架	奇異なる能	悔改む可こと	預言者	悪鬼
而	漢訳	我血、即立 新約之血	洗禮	亞孟	備節日	除酵節	踰越節	半厘	燔犧	聖書	士子	信	夫子	十字架	大能	悔改之道	預言者	汚鬼
且	大正改訳	契約の我が血	バプテスマ	なし	準備日	除酵との祭	過越	レプタ	燔祭	聖書	學者	信仰	ラビ	十字架	能力	悔改むべきこと	預言者	穢れし靈
そして	聖書協会(口語)	わたしの契約の血	バプテスマ	なし	準備の日	除酵との祭	過越	レプタ	燔祭	聖書	律法學者	信仰	先生	十字架	あのような力	悔改め	預言者	けがれた靈
				(KJV) Amen (RV) Amen (RSV) 注 Amen							(GK) youtireos)							

3 日本語として自然な表現にするための工夫

漢訳（中国語文）の直訳に近い『新約全書』の訳文の語順を日本語の語順に変える。

1 (1) 述語動詞の移動（文の最後へ）

1:17 イエスが二人にむかつて我に従へわれぬ汝曹を人を漁るものとして遣さうと仰られると

④ イエス彼等に曰けるは我に従へ我爾曹を人を漁る者とせん（傍線編者）

8:23 イエスにめくらの手おとりなされて村の外へつれて出、その目につばきをして手をつけてなにか見えるかとお問なされました

④ イエス瞽者の手を執て村の外へ携出その目に唾して手を彼に按といひけるは何か視るや

④ 耶穌執瞽者手、攜之出村外、既唾其目、且以手按之、則問其有所見否。

④(KJV) And he took the blind man by the hand, and led him out of the town: and when he had spit on his eyes, and put his hands upon him, and he

asked him if he saw ought.

11:2 人のまだ乗ぬ驢馬の子が繋いである

④ 全人の未だ乗ざる所の繋げる驢馬の子を…

④ 漢小驢繫馬。従未有人乗者

4:41 お弟子たちいたたいさうおそれたがひにこれはどういふ人であら

う風と海でさへも従ふとまをしました

④ 彼等甚しく懼れ互に曰けるは風と海さへも順ふ是誰なるぞ耶

16:7 (2) 従属節の移動（主節の前へ）
イエスになんぢらにさきだつてガリラヤへおいてなされたなんぢらのおふせられたとほりガリラヤでおあひまうすであらう

④ 彼の爾曹に先ちてガリラヤに往り爾曹かしこにて彼を見べし即ち其なんぢらに言しが如し

④ 耶穌先爾往加利利、在彼可得見之、如其所語爾也。

④ イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、あなたがたに言われたとおり、そこでお会いできるであろう。

(3) 形容詞（節）の位置
衣服もふたつ ④ 二の衣 ④ 下着も二枚

④ 我と偕に食する爾曹のうち一人われを賣すべし
④ 爾中之一、與我共食者、將賣我矣。

④ あなたがたの中のひとりで、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている。

2 名詞の単複数（井深は欽定英訳にならつて複数形にしたもの）

8:4 お弟子たち ④ 全その弟子 ④ 漢門徒 ④ disciples ④ or μαθηται
9:16 學者たち ④ 全學者 ④ 漢士子 ④(KJV) scribes ④(GK) ypouqumoteg

3:32 御兄弟たち ④兄弟 ⑤兄弟 ⑥brethren ⑦oi ἀδελφοί

3 主語の省略

1:31 熱がはなれて皆の給事をいたしました

④熱たちがまち去ぬ斯て其婦かれらに供事たり

10:4 ことへてまうしますに ④彼等曰ける ⑤其人曰

11:15 エルサレムにまあり

④彼等エルサレムに至り ④And they come to Jerusalem:

11:32 もし人よりといはゞ民をおそれました

④もし人よりと云ば彼等民を懼たるなり

⑤漢若云自人、則懼民 ⑥they feared the people:

14:20 座について ④かれら席に就て ④And as they sat and did eat,

14:18 ことへておふせますに ④イエス答て曰ける ④

④And he answered and said unto them,

14:26 歌をうたつて ④かれら歌を詠て

④And when they had sung an hymn,

4 助詞の追加

7:5 パリサイの人と學者たちがイエスに問ますに ④あなたの弟子 ④

④パリサイの人と學者等イエスに問ける ④爾の弟子 ④

8:23 イエスのめくらの手をおとりなされて村の外へつれて出、その目

につばきをして手をつけてなにか見えるかとお問なされました

④イエス瞽者の手を執て村の外へ携出その目に唾して手を彼に按とひけるは何か視るや

⑤耶穌執瞽者手、攜之出村外、既唾其目、且以手按之、則問其有所見否。

5 副詞などの追加

5:1 海を渡つてつひにガダラ人の地につき

④海を濟てガダラ人の地に着

6:3 ⑤遂至海之彼岸、加大拉人之地（漢訳にならったのか）

④全体彼の木匠でないか

④彼の木匠に非ずや

10:22 それといふ ④大なる身代をもつて居たからで

④彼は大なる産業を有る者なればなり

④for he had great possessions. (forがある)

④ἦν γὰρ ἔχων κτήματα πολλά. (γὰρがある)

12:14 ④神の道をおをしへなるからで ④さうりますらて貢をカイザルに納

る ④

④神の道を教ればなり貢をカイザルに納る ④

④but teachest the way of God in truth: Is it lawful to give tributes to

Caesar, or not?

14:21 ④その人いつぞ生れぬはうが福であつたらう

④その人の生ざりしかば幸なりし爲ん

Ⓚⅳ good were it for that man if he had neve been born.

15:20 さんぐく 嘲弄てうりやうまできまつてから

Ⓚⅳ 嘲弄てうりやうし畢をはりて

Ⓚⅳ And when they had mocked him,

Ⓚⅳ kai ore ēvstratēv aotrō,

15:38 そのとき 神殿とみやの幔まくらが上から下までなけて

Ⓚⅳ 殿みやの幔まくら上より下まで裂さて

Ⓚⅳ And the veil of the temple was rent in twain from the top to the bottom.

6 敷衍的記

14:37 イエスハ三人のところへおいでなされてその寝てをるを御覽みなされて

Ⓚⅳ イエス來きたりて彼等かれらの寝いねたるを見

Ⓚⅳ 澳あ逐退じつたい、見門徒けんたど寝、

15:6 この祭まつりのときにユダヤびとのねがひにまかせて

Ⓚⅳ この節筵まつりに彼等かれらが求ねがひに任まかせて

Ⓚⅳ Now at that feast he released unto them one prisoner, whomsoever they desired.

15:27 二人の盜賊ぬすめがイエスと、もに……十字架ごうじあに

Ⓚⅳ 二人の盜賊ぬすめかれと共に……十字架ごうじあに

Ⓚⅳ And with him they crucify two thieves;

7 日本社会、文化を表わすための工夫

(1) 人称代名詞

一人称

1:7 私われよりもまさつたお方みこと(ヨハネがイエスのことを)

Ⓚⅳ 我われより勝かれる者

もしサタンがおのれに悖立もとりたつて

10:51 3:26 なんぢの我われに何をまてもらひたひか

1:24 6:3 こゝに我々われらといつしゑよに居ゐではないか

私共われらのあなたと何の關係かへりがありますか(穢けがれた鬼おにがイエスに對たいして)

Ⓚⅳ 我儕われらハ爾なんぢと何かの與あり有あんや

二人称

14:70 2:11 1:24 あなたは誰たれであるか(鬼おににつかれたものがイエスに)

われ汝なんぢにいふ(イエスが癱瘋えんぷんのひとに)

おまへはたしかに……おまへの方言くにながらひが(火かにあたっている者が

ペテロに)

15:2 ピラトがどふてまうしますにハなんぢのユダヤびとの王みがイエスがこたへておふせられますにハなんぢのいふとほりである(前者ぜんしやはピラトがイエスに、後者こうしやはイエスがピラトに)

Ⓚⅳ 漢かんは「爾なんぢ」。

Ⓚⅳ And Pilate asked him, Art thou the King of the Jews? And he answering said unto him, Thou sayest it.

ギリシヤ語原文は両方ともD

二人称複数形

1:8 聖霊をもつてあなたがたにバプテスマを

④聖霊をもつて爾曹にバプテスマを施すべし

なんぢらひなぜ信仰がないのか(イエスが弟子たちに)

14:644:40 あの汚したことは御辺達もみなきかれた(祭司のをさが集議員

たちに)

④爾曹も聞る所なり

三人称

かのもの

5:9 そうしてかれらにおふせられますにハ(イエスが弟子たちに)

敬語

尊敬語

1:9 ナザレからおいでなされ

おゆるしなされませんでありました

御覧なされて(イエスが孩提を)

イエスハこれを不便に思召て

④イエス憫みて

1:40 もし御意にかなへば(癩病のものがイエスに)

④もし聖意に適ときハ

接頭語を付けて。

9:2 お容貌 15:44 お死なされた 5:35 御苦労をおかけなされますか

2:23 お弟子たち

5:28 お衣服

5:35 お娘

話題主。 10:17 善先生(資産を持った青年がイエスに)

(b) 謙讓語

1:21 カペナウムへまゐりましたが

④カペナウムに至る

1:30 そのことをイエスにまをしあげると

④之をイエスに告

1:24 私共 ④我儕

(c) 丁寧語

1:8 バプテスマをおほどごまなさるでござりませう

④バプテスマを施し、が

9:7 聲がござりました

9:5 三の蘆をつくらせてくださりませ

④主の御用である

(3) 日本(語)の通貨単位、度量衡、時刻、類別

12:42 レプタふたつ……これハ四厘ほどに

④ a farthing ④ κοδώντις

12:15 デナリをわれにもつてきて見せろ(音訳)

④ 漢金銭 ④ a penny ④ δηνάριον

12:42 レプタふたつをなげいれました(音訳)

④ 漢二半厘 ④ two mites, ④ λεπτά δύο

〈時刻はローマ式時間のまま〉

15:25 朝の第九時に ④ 漢時已辰盡、④ ὥρα τριτὴ ④ 第三刻

15:33 第十二時から三時まで 漢 自日中、至末終

〔KJV〕 the sixth hour.... until the ninth hour

曉の四時ころ 漢 夜約四更

15:34 6:48 第三時に 全 第三時に 漢 當未終時 〔KJV〕 at the ninth hour

〔GK〕 ὄρα τῆ ἐνάτῃ

〈適切な助数詞でなく〉

6:8 一の杖 漢 杖 〔KJV〕 a staff

6:38 二ツの魚 全 二一の魚 〔KJV〕 two fishes (二種類)

6:9 衣服もふたつ 全 二一の衣 漢 衣二衣 〔KJV〕 two coats

訳文

1 『新約全書』と異なる訳文

9:34 これのみちでたがひに論じあつてだれが一番大なるものとなる

かとあらそうたからでござります

〔全〕是途間にて互に論じ誰か大ならんと争いありければ也

〔漢〕以途間相議孰爲大也。

〔KJV〕 for by the way they had disputed among themselves, who should be the

greatest. (最上級)

〔GK〕 γὰρ διέταξε ὁ θεὸς ἐν τῇ ὁδοῦ τῆς μέγαλης (比較級)

10:33 人の子の祭司の長と學者たちにくらされかの人たちはこれを死罪

にさだめ

〔全〕人の子の祭司の長と學者等に付れん彼等これを死罪に定め

〔漢〕人子將付與祭司諸長及士子、彼將定之以死

〔KJV〕 the Son of man shall be delivered unto the chief priests, and unto the

scribes; and they shall condemn him to death,

〔GK〕 ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδοθήσεται τοῖς ἀρχιερεῶσιν καὶ γραμματέουσιν, ...

11:23 その心に疑はずにそのいふことは必らずなると信じて

〔全〕其心に疑ふ事なく其いふ所の言の必ず成べし信じ

〔漢〕中心不疑、乃信所言必也

〔KJV〕 and shall not doubt in his heart, but shall believe that those things which

he saith shall come to pass;

〔GK〕 πιστεύῃ ὅτι ἃ λέγει γίψεται,

2 井深訳、『全書』、漢訳ともギリシヤ語の時制(未完了過去)を表わ

す工夫

15:6 この祭のときにユダヤびとのねがひにまかせて一人の囚人をゆる

るす例がござります

〔全〕諸この節筵に彼等が求に任せて一人の囚人を赦すの例なり

〔漢〕屈節筵、常釋一囚、任衆所求者。

〔GK〕 .. Κατὰ δὲ ἐορτῆν ἀρτίζουεν αὐτοῖς ἕνα δέσμιον ὄντησιν παρατηροῦντο.

〔KJV〕 Now at that feast he released unto them one prisoner, whomsoever they

desired. (released 単なる過去形)

聖書協会口語訳は「さて、祭のたびごとに、ピラトは人々が願ひ

出る囚人ひとりを、ゆるしてやることにしていた」。

3 誤訳

8:19 わが四千人に五つのパンをわりあたへたとき

④ 我五千人に五のパンを擘あたへし時

⑤ 我擘五餅分五千人

(KJV) When I brake the five loaves among five thousand,

(GK) .. εἰς τοὺς πνυρακιζύλων,

10:40 けれどもわが右にすゐることはわが與ふべきところでない

④ 然ど我が右左に坐する事ハ我が予ふべきに非

⑤ 但坐我左右、非我得賜、

(KJV) But to sit on my right hand and on my left hand is not mine to give;

(GK) τὸ δὲ καθίσει ἐκ δεξιῶν μου καὶ ἐξ ἐπιώνυμων οὐκ ἐστιν ἐμὸν δοῦναι,

4 未訳出

16:14 またその、ち十一の弟子の食事をあてをるときにあらはれてその
信仰なきこと、その心の頑固をおいしましめなされました

④ 又その後十一の弟子の食しをる時に現れて彼等が信なきと其心の

頑固を責め給へし是かれらイエスの甦り給るのち其を見し者の

言ところを信ぜざり故なり

⑤ 後十一門徒席坐間、耶穌現於彼、而責其不信與頑、因不信其復生

後見之者也。

(KJV) Afterward he appeared unto the eleven as they sat at meat, and upbraided them with their unbelief and hardness of heart, because they

believed not them which had seen him after he was risen.

(GK) .. ὅτι τοῖς θεασαμένους αὐτὸν ἐνθυσημένον οὐκ ἐπίστευσαν.

10:19 姦淫するなかれ殺なかれ偽の證を立るなかれ

④ 姦淫する勿れ殺なかれ盗なかれ妄の証を立る勿れ

⑤ 母淫、母殺、母竊、母妄證、

7:8 すなはち鍋などをあらひいろくそのやうなことをする

④ 即ち鍋杯を洗おほく此の如き事を行ふ

⑤ 而洗滌杯爵、如是者、爾多行之。

(KJV) as the washing of pots and cups: and many other such like things ye do.

(GK) βαπτιστῶν ἕσποδῶν καὶ ποτηρίων. (ネストレ27になし)

14:39 また行ておなじし事をいふてお祈なされました

④ 復ゆきて同事を曰て祈れり

⑤ 復往祈禱、言亦如之。

(KJV) And again he went away, and prayed, and spake the same words.

(GK) καὶ ἔτι αὖτις ἀπελθὼν προσηύχετο τὸν αὐτὸν λόγον εἰπὼν.

5 全、英訳およびギリシャ語原文の受動態から能動態に変更

9:12 人の子についていその様々のくるしみをうけかつ軽しめらるゝ、
とがあるしてある

④ 人の子に就てい其各様の苦難を受かつ輕慢らるゝ、事を書さしるる

れたり

(KIV) how it is written of the Son of man,

(TK) πῶς γέγραπται ἐνι τῷ υἱῷ τοῦ ἀνθρώπου

6 代名詞与格を省略

11:1-2 イエスがふたりの弟子をつかはそうとまておふせられますにハ

全イエス二人の弟子を遣さんとして彼等に曰けるハ

漢耶穌遣門徒二人、語之曰、

(KIV) he sendeth forth two of his disciples, And saith unto them,

15:2 ピラトとふてまをしますにハ

全ピラト彼に問けるハ

(KIV) And Pilate asked him,

11:29 イエスがこたへておふせられますにハ

全イエス答て彼等に曰けるハ

(KIV) And Jesus answered and said unto them,

15:14 ピラトがまをしますにハ

全ピラト彼等に曰けるハ

(KIV) Then Pilate said unto them,

12:38 イエスがをしへをなされるときおふせられますにハ

全イエス教をなせる時かれらに曰けるハ

(KIV) And he said unto them in his doctrine,

15:15 ピラトは民の氣にいられやうとおもつてバラバをゆるして

全ピラト民の權びを取んとしてバラバを彼等に釋し

(KIV) Pilate, willing to content the people, released Barabas unto them,

文字と表記

1 分節化、分かち書きされていない。この時代、一般に文章を読む時に、黙読ではなく、音読された。朗読するので、声により意味の切れ目を浮かびあがらせることができた。句読点も打たない（漢訳には「、」「。」「印がある」）。

2 段落を設けず、改行する箇所も文字を一文字下げることはない。代わりに、あるまとまった内容（段落に相当する）の終に○印が付いている。これは『新約全書』、さらに漢訳聖書の方式に従ったものと思われる。

3 引用等を示すかぎ括弧「」は、引用文、会話文、内的独白にも付けない。また双鉤もない。
3:28-30 われまことに汝曹にいふ人のすべての罪と漬すところのけがれハ……刑罰に于るであらう、かく仰せられたのハ……

4 傍線、固有名詞人名に一重（但し「バプテスマ」にも）、地名に二重をカタカナの右側に施している。

1:9-12 そのころイエスはガリラヤのナザレからおいでなされヨルダンで

は 1:24 せふえち 10:33 うの人たちを 5:2 墓場
 ひ 4:27 夜日おきふしするうちよ 5:30 人々
 ふ 6:38 二ツお魚
 ほ 1:3 道筋を直くせよ 1:8 バプテスマをおほどこま
 ま 4:35 わふせら連誼した 5:19 憐れみみた誼ふた
 み 1:8 水をもつて 12:1 塔をたて
 む 2:16 お弟子にむうつて
 め 5:23 女 5:32 おぼし免して 8:32 諫免だしました
 も 5:25 も 1:7 足ぬもの 5:29 もはや病が愈た
 や 5:15 正氣 12:24 誤るでいふいう 5:29 もはや病が愈た
 ゆ 4:19 ふさぐゆゑ 6:40 五十人
 よ 14:28 ふんぢらとりさきよ 14:33 悲みをもとふして
 ら 10:37 左に坐せてくださいませ 10:38 知ぬ 15:44 百人の首
 り 1:10 おあがまふさる 8:14 あまませんであましました
 れ 1:3 野に呼ぶ人の聲あり 5:38 おいでふさふ
 2:20 新郎をとられる日 4:6 日が出ぬは曝うま
 ろ 1:19 網をつくろふて居 6:10 それとおえ
 わ 2:24 どういふ譯 9:40 まれに敵たはねもの
 り 1:16 湖に網を投てゐる 4:1 集まつてまかりました
 2:2 1:45 かたま播めたものゆゑ
 を 2:25 人々に教戒お宣べふさりました 2:25 従にをつた

ネ
 3:17 ボア子ルゲ
 6:53 ゲ子ザレ

8 送りがない

明治期には送りがないを少なく送る傾向があつた。井深訳には不統一が
 みられる。

1:24 滅し 1:15 神の國に近ふつた 1:44 獻ろ 1:27 みな驚て 6:27 首をも
 つて来 11:21 お誼なされた 3:7 お退ぞきなされた 2:26 與た 4:12 さい
 ても悟す 5:30 人々を顧りみて 6:11 塵を拂らへ 7:6 その録た言
 8:23 お問ふされました 10:2 試て問ままにハ 10:4 許ました 11:33 ふん
 ぢらに語ぬ 15:19 拜ました 15:12 悲ました

「明治四〇年には文部省の国語調査会が『送仮名法』をだした」とある。

濁点、半濁音は不統一。「ゝ」や「。」を付けないものもある。
 14:12 必らま 12:9 しつらへ 15:32 十字架よりくたふべし 8:15 麴醇
 14:1 除醇 14:22 イエスハパンをとつて

9 くり返し符号「く」「々」「ん」「ん」

14:67 つくぐ 4:19 とうく 15:14 ますく 5:33 ことぐく
 12:43 ひとつぐ 1:34 様々 9:39 軽々しく 1:7 うんて 5:33 戦慄
 11:14 弟子たちいおれをき、

10 促音 右に寄せ、小さく書くことはない。

1:36 シモンとまたいつまよに居たものども 1:41 わが意にかなつた

2:9 汝の床を取つて行^ゆけ
 5:26 うへつて悪くふりましたが
 8:2 三日^{とせう}
 5:30 わが衣服^{きもの}みさひつたもの
 9:2 六日^{むつち} ④六日^{むあか}

11 拗音 右に寄せ、小さく書くことはない。

2:10 ちゆうぶの人 3:28 われまことに汝曹^{ふんぢら}にいふ人のまべての罪と瀆^{たふ}せ
 ところのけがれい赦^{ゆる}されるが

12 ふりがな

ふりがなと送りがなが本文。漢字表記をふりがなによって補充している。翻訳委員社中において、「漢字を本文とするか振仮名を本文とする乎」という問題、(中略)遂に振仮名が本文と定まった⁽⁴⁾。井深⁽⁴⁾もそれを踏襲している。

1:8 聖^{せい}靈^{りやう} 1:27 命令^{めいれい} 1:28 名聲^{なせい}
 數多^{あまふ} 鬼^{おに}の王^{おう} 4:8 沃壤^{わくじやう} 貨財^{かざい} 1:30 岳母^{がくぼ} 附近^{ふじん} 義人^{ぎにん}
 安然^{あんぜん} 保護^{ぼご} 好機會^{こうかい} 7:21 苟^{かう} 合^{あひ} 7:25 幼い女^{わらわめ}
 子^こ放^{はな} 不情^{ふせう} 律法^{りつぽう} 環視^{わんし} 問安^{もんあん} 10:43 役^{やく}れるもの
 神殿^{しんでん} 器具^{ぐう} 休徵^{きゅうしやう} 風聲^{ふうせい} 13:8 困難^{こんなん} 13:14 殘暴^{ざんぼう} 14:38 誘惑^{まじひ}
 1:7 履^く 長老^{ちやうらう} 14:9 記念^{かたみ} 14:30 二次^{ふたたび} 15:1 平旦^{よあけ} 15:8 恒例^{こつれい} 15:21 田間^{いんか} 16:17 外國^{がくこく}
 1:35 味爽^{あじまへ} 3:6 黨^{とう} 3:19 イエスを賣^{わた}し^こもの

註

- (1) 海老澤有道『日本の聖書』二二七ページ。
- (2) 飯田晴巳『明治を生きたる群像』一六ページ。
- (3) 同書、一七ページ。
- (4) 海老澤有道『日本の聖書』二二八ページ。

まとめ

聖書の改訳はなぜ行われるのか。理由のひとつに、その時代と社会の人々が理解しやすいように、その当時のことばによって、神のことばをより正確に伝えるということが挙げられよう。翻訳の正確さという点では、底本にどのテキストを用いるか、という問題がある。翻訳委員社中は、井深談によれば、前述のように「エラスムスのテキスト・レゼプタス」だという。その言葉通り、『マルコ伝』一章一節の *ἰσχυροῦ θεοῦ* を『新約全書』とその改訳ともいふべき井深訳は共に訳している。後の大正改訳では「神の子」に注が付き、「異本『神の子』なし」とある。また九章四四節および四六節はない。同じく大正改訳、一六章九節から二〇節は亀甲（一）印、それに「異本九節以下を缺く」と欄外注付きである。それは明治訳と大正訳では使ったギリシャ語底本を異にしているからである。

後に述べるように井深訳は形を変え、出版元を変え、版を重ねた。その事實は、日本人読者の間で、文語の明治訳の他に口語訳が強く求められたことを物語るものであろう。その意味で井深訳は先に述べた改訳の持つ目的を果たしたといえよう。

井深が底本とした『新約全書』、その翻訳委員社中の漢訳聖書依存については繰り返し述べてきた。特に中国生まれの訳語は大正訳、さらに聖書協会口語訳へと継承され、それらの多くが現在の聖書訳語として用

いられている。例えば 12:24 ⑧ *τῆς δυνάμεως τοῦ θεοῦ* ⑨ *the power of God* ⑩ 神の能 ⑪ 神の力 ⑫ 神の力 ⑬ 神の能力 ⑭ 神の力。このように “Word for word” translation (Formal equivalence) である。

『新約聖書馬可傳俗話』には幾つかの版がある。豊田実は「私が日本神学校で見た明治十四年米國聖書會社東京印行の『馬可傳』には題箋の表紙の下、右寄に『俗話』と墨書してあって、内容は『これは神の子イェス・キリストの福音の始（はじ）まります』（變體假名が使用されてゐるのが普通の體に改めた）という文體の譯である。なほ同年英國聖書會社横濱印行の同じ『馬可傳』に、表紙のその「俗話」（「俗語」となつてゐるものもある由）といふ文字が別活字で押してあるものがあるとのことである。J・L・アママン氏 (Ameman) が石本氏の助けを得て成就された平易な日本語の馬可傳は明治二十一年（一八八八）に初版を出し、その後數版を重ねてをり、と述べている。石本氏とは石本三十郎と思われる。築地大学校出身の石本は開設当時の明治学院普通部教授、アメルマンは学院神学部教授であるから石本の名も考えられないことはないが、編者は英國聖書會社版は未見のためこれについて述べることが出来ない。

『新約聖書馬可傳』には他にも「明治三六年、『新約聖書ぞくごマコ伝』なる口語訳が、横浜の聖書館から発行された。訳者は不明である。

開いてみると、「これい神の子いえずきりすと」の福音の始で「ござります」(中略)、訳語は前掲の井深訳と全く同じである。ちがうところは個有名詞が片仮名から平仮名になっていること(中略)句読点が自由に打たれて読みやすくされていることだけである。発行者は、米国人ヘンリー・ルーミスとなっている。藤原氏は続けて「青山学院大学図書館目録に、ヘンリー・ルーミス訳『新約聖書ぞくごマコ伝』(横浜米国会社発行)とというのがあるので、行ってしらべてみたら、内容は前述の横浜聖書館発行の『ぞくごマコ伝』とおなじように、全く井深訳そのままである。個有名詞は井深原本と同じように片仮名で、句読点が打たれている。横浜聖書館版が四号活字なのに比し、これは昔の五号活字で組まれており、ヘンリー・ルーミスは訳者でなく、発行者になっているにすぎない。このころ、井深口語訳大ばかりで、各所から形を変えて出版されていたものとみえる。」

『日本聖書翻訳史』には「一九一二年七月(明治四十五) MAKODEN FUKUIN SHOMAKO 伝福音書(横浜聖書会社)」が載っている。その第一章一節は「Kore wa Kani no ko Jesu Kirisuto no fukuin no hajime de gozari masu」で、これは「明治十四年版」の忠実なローマ字翻字版である」と記されている。⁽³⁾ 同書には一九三四年(昭和九)年六月、アルパ社書店から井深訳復刻版が出版されたことも記している。

アルパ社版について前述の藤原氏は井深訳の動機について興味深い次の事実を述べている。「佐波文庫にある復刊本の扉には、『井深樞之助談に、これは当時私がたのみをうけ、すでに文章体に出て来たのをうつ

して、ただそのまま口語体にしただけのことで、目的は外国宣教師たちのためにかういふ試みをしたのでした」と佐波巨の字で書きこまれており、⁽⁴⁾ とある。前述のローマ字版は明らかに外国宣教師のためであったろう。

ローマ字版が出版される以前に、日本語の一八八一年刊『新約聖書馬可傳俗話』は来日宣教師のための日本語学習のテキストとして用いられている。一八八三年(明治一六)四月、大阪で開かれた宣教師会議は「口語訳マルコ伝を用いた読解と英文和訳の素材」として挙げられた、と報告している。⁽⁵⁾

これまで挙げたように、一八八一年の『新約聖書馬可傳俗話』の諸版が明治から昭和に至るまで繰返し出版されたのは日本人の間に口語による聖書が求められてきた顕われであろう。その宿願は『新約全書』から七十年以上後の本格的口語訳、日本聖書協会『新約聖書』、口語訳(一九五四年)を待たねば実現しなかった。

一八七四年に始まる新約聖書翻訳委員社中は、翻訳委員である宣教師側と日本人補佐役との間に訳文をめぐる議論が行われたが、文体は日本人補佐が主張する漢訳聖書の強い影響を受けた漢文訓読調の文語体に落ち着いた。宣教師委員、特に委員長 S・R・ブラウンの「普通の人民」が読めるように「出来るだけ通俗的に」というその願いには、図らずも弟子の井深樞之助の『俗話馬可傳』によって一歩近づいたといえよう。

「既に出て来た邦訳のものを口語体にして見たに過ぎない」という井深談は彼の謙虚な人柄を示すだけではない。聖書の訳文検討の基

準とされる三点⁽⁶⁾、その一、原典に基づく正確さという点では井深訳はギリシャ語原典を底本としたものではない。また先の指摘の通り、誤りも見られる。その二、聖書協会共同訳(二〇一八年)に採用されたスコプス理論(翻訳の目的と対象)でいえば井深訳は、格調高い日本語にして礼拝における朗読を目的としたものではない。そうではなくて、論点三、限られた読者のみを対象とせず、平易にして、「普通の人民」も神のこゝばを読んでわかるように訳す、というのがアメルマンおよび改訳者、井深梶之助の意図であったのであろう。

註

- (1) 豊田実「基督教聖書和譯の歴史」、『日本英學史の研究』(昭和四十四年、岩波書店) 七二二ページ。
- (2) 藤原藤男『聖書の和訳と文体論』(昭和四十九年、キリスト教新聞社) 一四九―一五〇ページ。
- (3) 門脇清、大柴恒『日本聖書翻訳史』(一九八三年、新教出版社) 三四九ページ。
- (4) 藤原藤男、同書一四九ページ。
- (5) 松本隆「日本語学習素材としての一八八一年刊『新約聖書 馬可傳 俗話』―明治前期に來日した外国人宣教師むけ日本語テキストの文体―」、『日本研究センター教育研究年報』(5) 二〇一六年、九五ページ。
- (6) 鈴木範久「聖書の日本語訳―略史と問題―」、月本昭男・佐藤研編『聖書と日本人』(二〇〇〇年、大明堂) 一ページ。

資料・参考書目

【聖書】

- Farstad, Arthur L. *The NKJV GREEK-ENGLISH Interlinear New Testament*.
Thomas Nelson Nashville 1994
- Green, Jay P. sr. *Pocket Interlinear New Testament*, Baker Book House, Grand Rapids, 1984
- King James Version*, Collins World
- Nestle-Aland, *NOVUM TESTAMENTUM Graece*, Wittenverlagsche Bibelsanstalt, Stuttgart, 1963
- The Revised Version*, 1881, *THE NEW Testament OCTAPLA*, Edited by Luther A. Weigle, Thomas Nelson & Sons, New York
- 黒崎幸吉『註解 新約聖書 マルコ傳』立花書房、昭和五二年
- 鈴木範久解説『文語訳 新約聖書』岩波書店、二〇一四年
- 鈴木範久解説『文語訳 旧約聖書』岩波書店、二〇一五年
- 塚本虎二訳『福音書』岩波書店、昭和三八年
- 日本聖書協会『新約聖書』改譯 昭和二八年
- 日本聖書協会『新約聖書』一九五四年改訳
- 聖書協会共同訳『聖書』日本聖書協会、二〇一八年
- 翻譯委員社中『新約聖書馬可傳』日本横浜上梓 耶蘇降生一千八百七十七年 明治十年
- ヘンリー・ルーミス発行者『舊新約全書』米国聖書会社、明治三七

年、日本横濱印行

『引照 新約全書』耶蘇降生一千八百八十年 明治十三年、日本横濱
印行

渡頼主一郎・武藤富男訳『口語譯新約聖書』キリスト教新聞社、昭和
二十七年

【辞書・事典】

岩隈直監修『新約ギリシャ語逆引辞典』山本書店、一九七七年

織田昭『新約聖書ギリシャ語小辞典』大阪聖書学院、一九六四年

玉川直重『新約聖書ギリシャ語辞典』キリスト教新聞社、一九七八年

藤堂明保他『漢字源』学研、二〇一四年

常葉隆興他『聖書辞典』いのちのことば社、昭和四十三年

『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年

馬場嘉市『コンコルダンス』新教出版社、一九五七年

山田俊雄他編『新潮国語辞典』新潮社、平成五年

【参考書目】

秋山繁雄『明治学院人間一〇〇年史5 アメルマン博士』『白金通信』

飯田晴巳『明治を生きた群像―近代日本語の成立』おうふう、平成十

五年

海老澤有道『日本の聖書』講談社学術文庫、一九八九年

片山徹『新約聖書ギリシャ語入門』キリスト教図書出版社、一九八一

年

門脇清・大柴恒『日本語聖書翻訳史』新教出版社、一九八三年
小林正博『書ければ読める、くずし字 古文書入門』潮出版社、二〇

一八年

笹淵友一『近代日本キリスト教文学全集』15 教文館、一九八二年

白畑司編集『インターニアギリシャ語新約聖書 マルコによる福音

書』上・中・下 ポーロス会、二〇一三年

鈴木進編『J・C・ヘボン ローマ字 *Mataiden fukuin sho*』明治学院

大学キリスト教研究所、二〇〇九年

鈴木進編『ローマ字聖書 YOHANNE NO FUKUIN オケイジョナルペー

パー』15 明治学院大学キリスト教研究所、二〇一二年

鈴木範久『聖書の日本語』岩波書店、二〇〇六年

田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房、一九九七年

王川直重『新約聖書ギリシャ語独習』キリスト新聞社、二〇〇八年

豊田實『日本英學史の研究』岩波書店、昭和四十四年

日本聖書協会『日本聖書協会一〇〇年史』一九七五年

浜島敏『日本語聖書と神の言葉』キリスト新聞社、二〇一一年

藤原藤男『聖書の和訳と文体論』キリスト新聞社、昭和四十九年

Brown, S. R. *COLLOQUIAL JAPANESE 1863* 復刻本、松村明解説 北

辰、一九七〇年

星亮一『会津藩流罪』批評社、二〇一二年

星亮一『井深梶之助伝』平凡社、二〇一三年

明治学院史料館資料集第一集「井深樞之助生誕一五〇年記念号」二〇

〇四年

柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房、一九八六年

松本隆「明治初期に文語から口語に改訳されたマルコ伝の時制反転―

一八八〇年『新約全書馬可傳福音書』と一八八一年『新約聖書馬可傳』の比較―」『清泉女子大学キリスト教文化研究年報』第21巻、平

成二十五年

山本夏彦『完本 文語文』文春文庫、二〇〇三年

©2021 MICS
All rights reserved
Institute for Christian Studies
Meiji Gakuin University
Shirokanedai 1-2-37, Minato-ku, Tokyo, Japan 108-8636
Telephone: 03-5421-5210
Telefax: 03-5421-5214

井深梶之助訳 新約聖書 馬可傳 俗話
〔MICS オケイジショナル・ペーパー 18〕

2021年2月16日発行 ©非売品

無断転載禁止

編集・発行：明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

電話 03-5421-5210

FAX 03-5421-5214

印刷：株式会社 白峰社
